を降し給はうが、災禍を降し給はうが、皆な是れ御身の慈愛深き御手より溢れ落ちるので、私の利益にならぬと云ふことはないのである。然れば『我心は定れり、主よ、我心は定れり』。何事によらず總て御身の思召に私の意を從はせ、何時でも、如何なる場合にでも、御身を讃美し奉る。仕合があつても、不仕合があつても。御身が私に近き下さつても、遠かり下さつても、慰めて下さつても、苦しめて下さつても、私は必ず御身を愛し、御身を望み、御身に感謝し奉るであらう。

主よ、私は御身を愛する熱信者の爲にも祈り奉る。彼等をして、益々熱心に、愈々完全に、御身の配として愧しからぬものとなら

しめ給へ。罪人と雖も、亦一度は御身の配なるべく、既に永遠の昔より許嫁られて居るのである。願くは彼等をも憐み給へ。一日も早く御身に相應はしき裝飾を爲すを得せしめ給へ。

天主の聖母にして、亦我母なる童貞マリアよ、私の爲に御子に祈り給へ。今より後、心を傾けて御子を愛し、死する迄、御子に離れることなからしめ給へ。アメン。

金曜日、　我等の救主なる耶蘇、

拜領前、

自分が嘗て惡魔の奴隷となり、其の苛重い首の下に泣いて居た時主は親ら其の奴隷の鎖を斷ち、其軛を取り外して下さつた。して其

の愛の事業を完成げんが爲、今自分の許に使徒でもやらず、預言者でも遣さず。天使、大天使でも差向けず。御身躬ら臨幸て下さらうとするのである。既に十字架の上では血を流して、死んで、私の爲に身代金を拂つて下さつたが、今や祭壇の上で、血ころ流し給はぬが、神秘な死に方をして、以て其の御苦難、御死去の功德を自分に蒙らしめ、再び自分を買取らうとし給ふのである。

何と云ふ難有い御惠であらう。人が其奴隷を買取るには、僅かの金錢を投げ出すのみであるが、主は、千金にも代へ難い御生命を擲つて下さつた。人は奴隷を買取つても、其奴隷の身には、鞭で打たれた傷だの、鎖の喰ひ入つた痕だのがやはり殘る。それ迄も癒して

呉れると云ふことは出來ないが、主は一旦買取つた以上は、其傷跡は拭ふが如く癒してやつた上に、卑しい奴隷風情のものを、忝くも己が親しい友とし、之に無罪の白衣を纏はせ、己が聖い肉を之に食べさせ、己が價貴き血を之に飲ませて、後々は己と一緒に、天の御國の家督を相續させようと思召し給ふのである。あゝ實に主の愛の深いこと幾何であらう。

御哀憐の限りなき救主よ、來給へ。疾く來て私を繫いで居る斯の苛酷なる暴君の手より救ひ出し給へ。私は嘗て、僅少の月腐金の爲に、煙にも等しい儚い名譽の爲に、夢の如な馬鹿々々しい快樂の爲に、我身を斯の恐ろしい壓制者に賣飛したのである。今一心と悔み

悲み、聲を限りに救を求め奉る。主よ、私を憐み給へ。御慈悲の手を伸して、私の軛を解き放ち給へ。御身は造主で、私は被造物御身は王様で、私は臣民、御身は父親で、私は子女である。願望私を見棄て給はず、速く來て私を救ひ上げ給へ。

いかに愛すべき救主よ、暗い〳〵失望の淵に沈んで居る私にも、希望の光が射し込んで來た。私は御身の限りなき御憐に深く信頼み奉る。御身は萬民の救主にて在せば、私をも救ひ給へ。御身がカルワリオ山の頂で、私の身代として流して下さつた價貴き御血は、今此祭壇の上でも犧げられるのである。願くは私の罪の償として、之を御父の尊前に進め給へ。又其御血を以て私の靈魂の汚を

洗ひ淸め、之に白妙の聖寵の衣を着けさせ、御身の聖き宴會の席に列るを得せしめ給へ。

世の罪を除き給ふ、神の羔よ、御身は私を惡魔の手より救ひ上げ給うたのみならず、私の餓ゑ疲れて居るのを憫んで忝くも御自分の聖肉を食べさせ、聖血を飲ましてやらうと思召し給ふ。御慈愛のほど膽に泌みて嬉しく、何とて御禮の申上げ樣もないのである。責めて是よりは、天使の如く身を淸淨にして、一点の罪の汚にも染まず、御身を愛して其熱愛の火焰に燃ゑ立ちたいものである。私が惡魔の手に落ちたのは、餘りに浮世の儚い財寶、汚らはしい快樂を貪つたからであるから、今私は斷然此等の快樂、財寶を棄て、唯だ一

途に御身を愛せんと決心し奉る……汝等浮世の財寶よ、名譽、快樂よ、私に離れてサッサと茲を立ち退け。汝等を望む人に愛されよ、私はたゞ主ひとりを愛する、心も、愛情も、所有物も、唯だ主ひとりに献げ奉るのであるから。

あゝ救主の御母マリアよ、御身の功德を主に献げ給へ。私が今朝御身の御子にして、亦私の救主なる耶蘇を熱心に拜領り、ろの聖い御肉を食べ、其の價貴き御血を啜つて、御救贖の功德を溢るゝばかりに蒙るを得せしめ給へ。アメン。

拜領後、

救主耶蘇よ、御身は私の心に臨幸で下さつた。斯う云ふ胸も塞かさうな、陰氣な所でも厭はずに、御身は來て下さつた。愛情の逆る所、何物も之を遮ること出來ないのであらう。あゝ御身は如何してゞも私を救ひ出さうと思召し給ふのであるか。然らば主よ、私が御足の下に拜伏して、之を抱きしめ、之に接吻し、之に涙の雨を濺ぐを許し給へ。私は誓つて御身の大恩を永遠を感謝し、何時迄も〳〵御身の有となり、唯だ御身獨りの有となりたいのである。

然し是は私の望だけで、御助力に頼らなければ到底出來る話ではない。願くは御身の愛の御業を成就し給へ。私の繋がれて居る枷を解き放ち給へ。罪科の鎖でも、情慾の綱でも、惡習の絆でも、サラリと切斷つて、神の子たるの自由を與へ給へ。此自由こそ、世の萬

ての寶よりも遙に價高く、貴重ずべきである。願くは私の智を塞いで居る誤謬の雲を打拂ひ、私の心に立籠めて居る空想の霧を吹散らし、意志を正しうして、再び御身に叛かしめず。五官を矯めて、浮世の事物を戀ひ慕ふことなからしめ給へ。

斯くて、私を全く御身に引附け給へ。心地よい愛の絆もて私の心を繫ぎ留めて、如何樣の事があらうとも、再び御身に離るゝを許さず、及ぶ限りの力を盡して、唯だ御身にのみ奉事へ、唯だ御身をのみ愛するを得せしめ給へ。御身の爲には、全世界の財寶でも、帝王の位でも、世の如何なる歡喜、快樂でも、土塊よりも輕じ奉る。今よりは驕慢の僕となつたり、虛榮心の奴となつたり、肉慾の虜となつたり、果ては信賴むの心を失ひ、愛德に背き、從順を缺き、堪忍を破るなど、如何なる過失でもあつてはならぬと、固く心の帶を引締め奉る。

主よ、私は金銀を以て贖はれたのでない、實に御身の價貴き御血を以て買戻されたのである。然らば私の身は御身の有である。買取つて下さつた御身の有である。是からは御身ひとりの有となつて、唯だ御身にのみ仕へたい。主よ、私の自由を殘らず受取り給へ。私の記憶も、私の智慧も、私の意志も受取り給へ。私の身に屬いて居るもの、手に有つて居る所、皆な悉く御身より戴いたのであるから、殘らず御身に獻げ奉る。是等を受取つて、思召の儘に取計ひ給

へ。唯だ御身の愛と、聖寵とを與へ給へ。私はそれでもう充分である。他に何一つ望む所はない。

私の決心は實に斯うであるが、然し私は性來虚弱い、淺ましいもので、是迄も幾度となく敵に欺かれ、心の門を打破られ、身は捕虜の辱を受けて、御身の親和を失つたか知れないのである。願くは聖寵を垂れて私を照らし、強めて、是からと云ふものは、一度でも御身に離れることなからしめ給へ。然し息の根の通つて居る間は、何時また心變がして、御身に離れようとするかも知れない。今迄の經驗でも明である。主よ、決して〳〵然る禍に遭はしめ給ふな。私を援け給へ。再び御身に背き奉らんよりは、寧ろ今尊前に死

なしめ給へ。

主よ、願くは聖會の信者にも神の子の自由を與へ給へ。又暗の中に彷徨ひ、死の蔭に座して居る異教の人々をも憐みて、彼等の上にも救ひの御手を伸し給へ。

慈悲深き童貞マリアよ、私を援け給へ。御身は永續の母と稱へられ給へば、私にも斯恩を賜ひ、終を全うするを得せしめ給へ。

アメン。

土曜日、　我等の善き牧者なる耶蘇、

拜領前、

自分は哀なる迷羊！善き牧者なる耶蘇は、今自分を搜ねて下さ

る。自分が現代の荒野に彷徨つて、今にも狼の毒牙に掛かりさうなのを不憫に思召して、わざ〳〵自分を捜ねて下さるのである。サテも御芳志の難有さよ。如何して飛び立つて出迎へないで居られやう。

不親切な僞牧者に欺されて、主の羊舍に遠かると云ふは如何に禍であるか、是迄の苦い經驗で充分解ることが出來たから、自分は今胸を打ち痛悔の涙を揮つて、急いでこの善き牧者の前に進み出よう。決して自分の罪を責めて、尊前から追拂ひ給ふ樣なことはあるまい。却て快く受附けて下さるであらう。力を添へて下さるであらう。御膝下を離れなかつた忠實なる羊の群に加へて、立派な位地に置い

て下さるに相違ない。

あゝ主耶蘇よ、御身は私の如き忘恩奴すらも厭がり給はぬのであるか。私ゼ御身の招待も、威嚇も顧みないで、一から十まで御身に背いたものである。私の仕打は、ナカ〳〵他の羊どもの躓であつた。ろれでも御身は私を見棄て給はぬで、善き牧者の名にも違はず、始終私を捜ね廻つて下さつた。今は遂に私に近いて下さる。私を御肩に乘せて下さる。私の餓ゑたる腹を飽しめようとて、御自分の御肉、御血を與へて下さる。私を强めて、一心に御身を愛さして下さる。あゝ御身は實に私の滅びるのを望み給はぬのである。

然れども御身は何の必要あればとて、斯く迄私を愛し給ふのであ

る。天の諸の聖人、地の數々の善人等は、皆な是れ御身の羊舍の羊である。御身の如く富み、且つ權力ある御方が、私を棄て置いて滅亡に至らしめ給ふたとて何の困る所があらせられよう。私を救ひ上げて下さつたからとて、何の益する所もあらせられよう。然るに御身は、私が居なければ、安心が出來ない、幸福でもあられぬものの樣に、態々現世に天降つて、私を搜して下さつた。殊に不思議なのは、他の牧者は自分の飼つて居る羊の肉を食べ、其乳を飲むが、御身は却て御自分の聖肉を私に食べさせ、御自分の聖血を私に飲まして下さる。他の牧者は自分の利益の爲に、其飼羊を賣つたり、屠つたりもするが、御身は却て私を活すが爲に、柔和なる羔の如く、

自分が賣られ、屠られ給ふ。今日も祭壇の上に於て、私の爲に犧牲ともなり、養料ともなつて、私の傷口を塞ぎ、衰弱つて居る私の力を補足つて下さらうとし給ふのである。

主よ、私は斯ほどの御慈愛、斯ほどの御親切の雨露に潤ひながら、如何して再び僞牧者の聲に耳を傾け、世俗、情慾の口車に乘せられて、良き羊の群を離れられよう。如何して再び善き牧者なる御身の聲を輕じ、御身に献ぐべき愛を偸んで、他の者に献げられよう。

慈愛深き牧者よ、是からは御身に聲を掛けられながら、耳を塞いで逃げ出す樣な考は毛頭ない。何時迄も忘恩奴であつてはならぬ。

私は涙を揮つて告白し奉る、私は餘りに長く御意を痛め參らした。然し今は心の底より痛悔し、胸を拊つて身足の下に拜伏し奉る。今日迄御身の指揮に從はず、迷羊となつて御意を苦めた罪を赦し給へ。是よりは唯だ御身を愛し奉るであらう。唯だ御身をのみ愛し奉るであらう。

〃あゝ慈悲深き牧者よ、私は一心と御身に向つて憧憬れ奉る。來給へ。來て、私の心を占領し、之を全く御身の所有となして、此處にすべての疲勞を休め給へ。あゝ天より降りし活けるパンよ、疾く〳〵私の養料となり給へ。私の歡喜ともなり、生命ともなり給へ。私は御身を愛し奉る。萬事に超ねて愛し奉る。御身を拜領けて、御

身と一致して、益々御身の愛に燃ね立ちたいものである。

慈愛の御母マリアよ、私は憐れなる迷羊ではあるが、亦御身の愛子でもあれば、今私を善き牧者にて在す御子の前に進め給へ。御子を拜領り奉らうとするこの私の心が、一点の罪の汚もなく、却て德の光に輝き渡ること叶ふやう、御子に祈り給へ。御身が嘗て聖体を拜領するの幸福を得給うた時の見事な準備を御子に献げて、私の準備の不足を補ひ給へ。如何にかして、御子の稜威に適はしき住居を、私の心に備ふるを得せしめ給へ。アメン。

拜領後、

善き牧者なる耶蘇よ、御身は夜となく晝となく、御身の羊舍に飼

はれて居る羊の群を擁護り給ふ。狼を防ぎ、僞牧者を遠ける、病に罹れば之に藥を與へ、路に迷へば之を搜ね、後れると之を挨ち、歩めない時は之を肩に乘せ、之を芻の豊な牧場に連れ行き、渦けば活ける水の泉に飲ませ、餓ゑると自分の聖肉を食せ給ふ。

私の爲にも、この不忠なる迷羊の爲にも、今日は然うして下さつたのである。私は固より貧しい、憐れなもの、如何して斯の海山啻ならぬ聖恩に報い奉ることの出來よう。責めて及ぶ限りの熱愛の情、感謝の念を献げたいものである。然しろれでも鴻恩の萬分の一にも當るに足りないから、天に在す諸の天使聖人、地の總ての善人等の献げられる感謝、殊に御身が聖体を御制定め遊ばした時、御

自分で献げ給うた感謝をば、私の些少の謝禮に合せて謹んで尊前に進め奉る。

主よ、私は今御足の下に拜伏し奉る。御手を擧げて私を祝し給はずば、此處を立退くまい。主よ、この憐な迷羊を顧み給へ、私は大に弱つて居るから萬望强め給へ、病み疲れて居るから萬望癒し給へ。非常に饑ゑて居るから萬望御身の聖寵を以て飽かしめ給へ。私は復再び狼の毒牙に掛りはすまいかと始終氣遣はしく思ふ。私を守護し給へ。願くは御身の善き羊等の如く、正直で、柔和で、聞分のよいものとなし給へ。何時も私を御手下に置き給へ。今後は御身を措いて、他の牧者に從つたり、御身の聲を聽かないで、他のに耳

を傾けたりする考は少つともない。私の希望は掛つて御身の上に在る。私は一身を御手に委ね、謹んで御身の御計に安じ奉る。

いかに御父の輝なる耶蘇よ、如何して御身は、斯う云ふ汚らはしい私を捜ねて下さつたのである。唯だ私の愛に曳されてゞあらう。私に望み給ふ所もたゞ愛のみであらう。然らば私は御身を愛し奉る。御身を愛して、一身を殘らず御身に獻げ奉る。

主よ、私は御身を眺めみた此目を開けて、再び浮世の儚い事物が見られようか。否やゝ、今後は唯だ御身の美しさに見とれて、少つとでも側へ目を外らしてもならぬ。さもなくば寧ろ潰れて盲目となるが望である。

私の口は御身の聖い御肉を以て聖別められ。價貴き御血に紅く染つたのであるのに、如何して再び無駄口を叩いたり、諧謔けたり、虚言だの、謗誹だの、淫靡がはしい語だのを吐いたりされよう。イヤ〳〵今後は口を開けば、必ず御身の事を語り、饑ゑては必ず天使の食を求め、渇けば必ず生命の泉源たる御身を望みたい。もう私の口からは平和、清淨、信心、愛德の言語だけしか溢らしてはならぬのである。

終に私の心は、限りなき御慈愛を蒙つて、御身の住所となり、現世ながらに御身を抱き締めること出來たのであれば、如何して御身の外に、一物たりとも愛されよう。御身は限りなき善にして、すべ

ての愛すべきもの〻中に取分け愛すべきもの、他の物は御身に對してこそ愛すべきで、唯だ御身ひとりが御身の爲に愛すべきである。主よ、私は一生涯御身の聖意を喜ばせたい。御身の望み給ふ所を告げ給へ。何事であらうが、飛び立つて從ひ奉るであらう。願くは御身の命じ給ふ所を與へ給へ。望み給ふ所を命じ給へ。

今靜に主の御囁を聽かねばならぬ。不足を指し、柔かに咎めて、之を悛める方法を授けて下さることもあらう。今日の中に斯〻の犧牲を獻げ、斯〻の慾に打克つ樣命じ給ふこともあらう。何を命じ給ふとも飛び立つて從ひ奉らねばならぬ。斯る大きな聖恩を忝うしながら、如何して少とでも、主の御望に背かれよう。

尙ほ平素、主に對して立て居る誓願だとか、爲して居る約束だとかを新にして、心より次の如く祈るが可い。

主よ、私を扶助けて此の善き決心を行はさせ心より御身に奉事へさせ給へ。私が今迄爲した所は取るにも足りないから、今日より立派に始めたいものである。願くは罪の重量に壓へられて居る私の心を抱き起し、其希望を高く天の上に引上げて、天國の限りなき榮福を玩味はしめ、もう地上の事は考へるさへ厭らしいと思ふに至らしめ給へ。愛の絆もて私を固く御身に結び附け給へ。私の爲には御身ひとりで充分である。御身の外は總てみな虛しく、儚くて、何一つとして私の心を引くに足るものなしである。

主よ、私は他の羊の爲にも祈り奉る。願くは御身の羊舍なる聖會を護り治めて、益々隆盛ならしめ給へ。

いかに憐の御母マリアよ、私の祈願を御子に傳達ぎ給へ。私を御子の羊舍に繫ぎ止めて、再び彼の狼の群に迷ひ込んで、其の恐るべき毒牙に懸ることなからしめ給へ。守護の天使、保護の聖人よ、私の爲に主を讃め稱へ、其大恩を感謝し給へ。死する迄、この樂しい主の羊舍を跳ね出すことない樣、私の爲に聖寵を乞求め給へ。アメン。

毎月の要務

月の靜修、

一、月の靜修の必要、

世に救靈ほど肝要なのはないが、亦是ほど難かしいのもない。天國の道は狹くて險しい上に、右にも左にも、廣々として平垣な、花笑ひ、鳥歌ふ地獄の路が入り違へて居る。人情は得て難きを避けて易きに就きたがるもので、動もすれば邪路に蹈み迷つて、救靈を失ふの不幸に陷らぬにも限らない。であるから時々は立止つて、自分の歩いて居る道は果して正しい道であるか、邪路でないかと反省る

心要がある。如何に固い決心でも、時として之を新にしないと、何時の間にか弱つて了ふ、極めて聖い行爲でも、狎れると狎褻して格別大事にも思はなくなる。信仰の眼は曇り易く、熱心は冷え易い、身は終に知らず識らずの中に冷淡に流れたり、大罪の懸崖に足を滑らしたりするやうな危險に陷るのであるが、斯う云ふ危險を遁がして呉れるのが、即ち月の靜修である。

月の靜修とは、毎月一度、月の初か終かに、過ぎ去つた一ケ月間の出來事を篤と糺明して、來月の爲に決心を更新にするのと、人の生命の儚いことを思つて、豫め死の準備をして置くのとを謂ふのである。月に僅か一度の事である。日曜日にでもすれば、時間も格別

費えないで、救靈には非常に益になるのだから、何人しも月の靜修だけは、務めて缺かさない樣して欲しいものである。

二、月の靜修の方法、

前の晩に、「聖靈の降臨を望ひ祈」を恭しく誦へて、其聖光を請求め、同じく聖母マリアの御助力をも祈る。出來れば夕飯は多少控目にして、善き靜修の恩を願ひ、又平生よりも心を靜かにし、敬虔の念を發しながら床に就く。

朝、目が醒めると直に心を天主に上げて、今日の一日は、天主と一ケ月間の總勘定をする爲に與へられた日であると思ひ、力めて心を亂すやうな念を避けねばならぬ。靜修は讀んで字の如く靜に身を

修めるのであるから、朝から心を靜にするのは極めて大切である。

朝の祈禱の後、救靈の必要だとか、死去だとか、審判、地獄だとかに就て暫く默想する。而かも最後の默想でゝもあるかの樣に熱心を籠めて爲ねばならぬ。

ミサの中には、善終を遂げるの恩を一心と願ふ。

午前か午後かに、ユックリと一ケ月間の總紀明をする。先づ聖靈の聖光を祈り求めて、徐ろに自分の靈魂に眼を注ぎ、毎日の要務に就て如何であつた、前の靜修に決心した所は如何に守つた、自分の職務は如何に果した、不足は幾ほど矯まり、德は幾ほど進んだ、何の点に就て過失があつた、其過失の原因は何であつたかなど、逐一

調査べて見るのである。

過つた所は痛悔して赦を請ひ、來月の爲に決心を更新にする。然し唯だ一般に、來月は一段と熱心にならう、罪は犯すまいと決心したばかりでは足りない。斯々の不足を斯方法を用つて悛めよう、斯々の德を斯手段によつて行はうと思定めて天主の聖寵を祈り、聖母の御助を求め置かねばならぬ。紀明の後に告白することが出來たら最も妙である。

斯日は、信心の勤行でも、職務上の仕事でも、成るべく心靜に之を行ひ、騷がしい人中を逃げ、無益な雜談を避けて、少とでも心を亂さぬやう、注意せねばならぬ。

夕方、聖体か十字架かの前に跪いて死の準備をする。糺明と死の準備とは、月の靜修に缺ぐべからざるものであるから、若し夕方に時間がある事いと思ふ時は、責めて朝、默想の代りにでもせねばならぬ。其方法は次に示す。

翌朝、臨終の聖体と思つて恭しく主を拜領り、新らしい月を天主に献げ、其御助力を祈る。

死の準備

一、死之默想、

聖堂か或は靜かな室内かに引籠り、暫時の間浮世を忘れ、恭しく十字架の前に拜跪いて、今自分は死に臨んで居る、守護の天

使が來て、「汝の終が近いた、汝の家を取片付けよ」と曰ふのを聞くと想像して、

一、死とは何であるか、

二、自分は何時、如何にして死ぬであらう、

三、今自分の靈魂の狀態は如何であるか、

と心靜に默想して見ねばならぬ。

(一)、死とは何であるか。死とは人間萬事の訣別である。死ぬ時は、懷かしい父母に訣れ、可愛き妻子に訣れ、無二の親友にも訣れる、而かも永遠に訣れるのである……

死ぬ時は自分の家に訣れ、自分の財産に訣れ、自分の有つ所にす

べて皆な訣れる……自分が今日まで汗水流して求め得た幾町歩の田畝、自分が今日まで苦心して積み貯へた幾千萬の財寶、自分が今日まで人に誇つて樂んで居た寶物にまで訣れる。一つも殘らず皆な訣れて了ふのである。たとへ好いて〳〵、如何しても離れ難く思ふ所の物にでも、一日も片時も別れて居られないと云ふ人にでも、皆な殘らず訣れねばならぬ……嗚呼實に思つたばかりでも、ギヨッとして冷汗が流れるほどである。然れども仕方がない。是非とも然うならねばならぬ……現世の財寶や、歡樂やは實に儚いものでないか。身も心も傾け盡して漸く手に入れたかと思へば、もう直と殘らず棄去ちねばならぬ。それに斯な儚いものに心を奪はれて、永遠の財寶、

窮りなき歡樂を棒に振ると云ふは、餘りの馬鹿げ方ではあるまいか。

死ぬ時には、靈魂は身躰に訣れて出て行つて了ふ。其時身躰の狀態は如何でおらう。僅か二十四時間經つか經たぬ間に、はや其姿は恐ろしい迄に變り果て、臭い香は鼻を突き、父母兄弟でさへ薄氣味惡く思ひ、急いで棺に收めて、墓に送りやつて了ふ。墓に送りやられてから如何なり果つるであらう……自分の此身躰は、今が今まで寒からぬやうに、暑からぬやうに、饑渴を覺えないやうにと、朝な夕な、寢ても起きても大切にして居た此身躰は、靈魂よりも天主よりもと、愛して愛して撫で擦つて居た此手足は、美しく裝飾して人の前に誇つて居た此顏容は、日ならずして腐れ、爛れ、蛆虫の餌食

となり、見るさへ恐ろしき姿に成り變つて了ふであらう……

サテ〳〵自分は斯う云ふ淺間しい身躰を、間もなく一抔の埃となり、忌々しい白骨どもなるべきこの儚い身躰を可愛がつて居たのである か。此身躰の爲に、大事な〳〵、掛換のない靈魂までも、其の永遠の生命までも拋擲つて居たのであるか……

墓に入つて了つてから、自分の事を思ふ人があるであらうか。其の當座こそ思出しもしようが、何時の間にか忘れて了ふに相違ない。世界に名を轟かした人でさへも、二三ケ月の後には、一二ケ年の後には、大概の人に忘れられて了ふでないか……して見ると人の名譽と云ふものも、實に煙の如なもの、決して信になるものでない……

サテ身躰を離れた靈魂の行先は何處であらう。住み慣れた現世を出て、見も識りもせぬ別世界に赴き、直と天主の法庭に召換される。身獨りで天主の尊前に立たされる。其の正義怖るべく、万事を洞察さ、罪を何よりも嫌つて、些の情をかけるでもなく、有の儘に裁き給ふ天主より、一生涯の善惡を嚴重に糺されるのである。して其の嚴しい判事の御口より、「來れ、我父に祝せられたる者よ、世界開闢より汝の爲に備へられたる國を得よ」との申渡を聽くか、或は又、「詛はれたる者よ、我を離れて、惡魔と其使等の爲に備へられたる永遠の火に入れ」と云ふ宣告を受けるかせねばならぬ。

あゝ天主よ、私は今まで儚い現世の快樂に耽り、肉身を撫で擦つ

て、靈魂を忘れて居たのを深く悔い悲み、偏に赦を願ひ奉る。赦し給へ。主よ、赦し給へ。今よりは行を悛め、志を立直して、唯だ御身をのみ愛し、唯だ御身にのみ仕へんと決心し奉る。

(三)、自分は何時、如何にして死ぬであらう。人は一度は心ず死なねばならぬ。然し何時死ぬであらうか、一向分らない。年は若し、躰は强健し、三十年、五十年は大丈夫だと安心されようか、一向分らない。今日明日にも死にはすまいか、ろれすら分らないのである。人は常に思はぬ時に死ぬものである、長の病を痛つて居る人でさへ、多くは思はぬ時に死ぬでないか。夕には笑ひ興じて眠に就いたものが、朝にはもう現世の人でなかつた例も少くはない。食べつゝ死ぬ

ものもある。飲みつゝ死ぬものもある。某は賊に斬られて死んだ、某は水に溺れて死んだ、火に燒けて死んだ、懸崖から落ちて死んだ、腦充血で卒倒れた等、日も日も聞かぬ事なしである。「死は盜人の如く、思はぬ時に來るものだ」と云ふが、實際さうである。

死ぬ時に、秘蹟を授かる餘裕があるであらうか、如何か分らない。告白もせずして死ぬ樣な不幸を見ることはあるまいか、ろれも如何か分らない。俄に物が言へなくなりはすまいか、人事不省に陷つた儘、正義の法庭に召出されはすまいか、ろれも全く分らないのである。假令さう云ふ不幸がないにせよ、手足痺れ、眼眩み、頭痛激しく、舌の根硬り、熟に浮かされ、生汗漓り、父母も妻子も、枕を

擁いて泣き騒ぐと云ふ臨終の時に、如何して徐々罪を痛悔し、天主の義恐を和げ、其御憐を求める餘力があるであらう。

思へば〳〵永遠と云ふ大事件でないか、永遠に幸福なるか、禍殃なるかと云ふ大問題でないか。それを最後の間際まで差延して顧みもしないと云ふは、餘りに馬鹿げて居ると云ふものではあるまいか。

救主耶蘇よ、私は其日も其時も知らないから、常に警戒の上にも警戒して、身を慎み行を研き、何時死んでも差支ないやう充分に備へ置きたいものである。願くは聖寵を垂れて私を援け給へ。

(三)、今自分の靈魂の狀態は如何である。今死ぬと云ふなら、準備が出來て居るであらうか。早速すべての事物に訣別して、天主の裁

判に出頭られる丈けの準備が出來て居るであらうか。自分の良心には疚しい所はないか。今迄の告白に就て、聖体に就て、不安心の点はないか。今死んでも、彼の多い時間を！彼の五十年、六十年の長い歳月を！」と臍を噬んで後悔する所がないであらうか。支拂ふべき筈のものが未だ滞つて居はしないか。赦すべき筈の事を未だ赦さずに居はしないか。長上に對しては如何である。朋友に對しては如何である。父母の務、夫婦の務、主人僕婢の務は如何である。

唯つた今死ぬと云ふならば、斯々の事は斯うするであらうか、彼あ云ふであらうか。死ぬ時には、財寶を積み、快樂を漁つて居たのを喜ぶであらうか、天主を愛し、人を惠んで善業の功績を積み重ね

て居たのを殘念に思ふでわらうか……是れでは死なれぬと思ひながらもろれを改めようともせず。是非斯うせねば安心が出來ないと思ひながら、ろれを遣りかけようともしないのは、餘りに馬鹿げて居ると云ふものではわるまいか。

あゝ主耶蘇よ、御身は此の憐れなる罪人の爲に、御血を漓め盡し給ふたことを記憶ひ給へ。其御血の功德によつて私の心を照らし、今迄の不足、罪科を一心に悔い悲しめ、今後は心を改めて、全く新らしき人となるを得せしめ給へ。

憐れみの御母マリアよ、私の爲に祈り給へ。守護の天使、保護の聖人よ、私を扶け、護りて善終を遂げるの幸福を得せしめ給へ。

なるべく長く右の觀念を續け、感情を燃やし、決心を固め、然る後、十字架を握りつゝ跪いて次の宣言と祈禱とを誦ふべし。

善終を準備する爲の宣言、

主よ、私は尊前に伏して御身を拜み、今現世を去りて永遠に入るものとして、左の宣言をなし奉る。

主よ、御身は僞ることも、謬ることも能ひ給はざる眞理にて在すが故に、私は御身が公教會に啓示し給うた聖教を悉く信じ奉る。先づ三位一体の玄義を信じ奉る。父と子と聖靈は三位なれども唯だ一つの天主に在して、後世に於て善人は之を天堂に賞し、惡人は之を地獄に罰し給ふことを信じ奉る。次に天主の御子、第二のペルソ

ナが世を濟はん爲に人と爲りて、十字架上に死に給うたことを信じ奉る。終に公教會の信ずる所を殘らず信じ奉る。私を基督信者として下さつた聖恩を感謝し、生さるも死ぬるも、必ず斯信仰を離れまいと宣言し奉る。

私の信賴なる天主よ、私は哀れな罪人で、地獄に投込まるべきものであれば、何一つ我身に恃む所はない、唯だ救主耶蘇基督の功德に賴れば、御憐を蒙り、罪の赦を得、御身の聖寵を終りまで保全つて、終には天國の福樂を忝うすること能ふと云ふ御約束があるから、私は之に深い多望を置き奉る。假令臨終の間際に、惡魔が私の罪惡を數へ擧げて、私を失望の淵に突落さうとしても、私は篤く

御身に信賴み、情深き御腕に身を投げ掛けて死にたいと望み奉る。

おゝ限りもなく愛すべき天主よ、私は萬事に超えて御身を愛し奉る。斯愛情の火に燃えながら死に、續いて天國に於て、御身を一心に愛したいものである。私が天國を冀ふのは、唯だ御身を心より愛したい爲であつて、身の福樂を望む爲でない、私は今まで御身も愛せずに、却て侮り辱めて居たことを悔み悲み、御身に浴びせかけた狼藉をば、返す〳〵も口惜がり、痛悔の涙を打揮り〳〵死にたいものである。復と罪を犯して御身に背かんよりは、寧ろ今潔く死なしめ給へ、私は御身を愛するよりして、私に害を加へたる人々にも、心より赦を與へると今より宣言し奉る。

主よ、私は死去と死去に伴ふ總ての苦痛をば潔く引受け、御身の無上の主權を尊ぶが爲、且つは私の數限りなき罪を償ふが爲に、之を御子耶蘇の御苦難、御死去に合せて、謹んで尊前に獻げ奉る。願くは御子が十字架上にて獻げ給うた御生命の犧牲に合せて、私の生命の犧牲をも嘉納め給へ。私は全く御身の思召に身を委ねて、「聖旨は何時迄も行はれ給へ」と申しつゝ死にたいものと、宣言し奉る。

私の代願者にして、亦慈母にて在す童貞聖マリアよ、臨終に際しては、御身こそ私の唯一の慰藉、信頼にて在せば、私は今より深く御身に頼り靠り、彼の恐るべき時に私を援け給はんことを伏して祈り奉る。最も愛すべき元后よ、彼日に私を見棄て給はず、私の靈魂

を受取りて、之を御子の尊前に進め給へ。私は哀れなる罪人ではあるが、願くは御身の御足を抱きしめつゝ、御蔭の下に死するを得せしめ給へ。

私の保護者なる聖ヨゼフ、大天使聖ミカエル、守護の天使、保護の聖人よ、彼の恐るべき最後の戰に當つて私を援け給へ。

十字架の上なる最愛の耶蘇よ、御身は私に善終を遂げさせんとて、御自分には見るさへ怖ろしき死を擇び給うたのである。サレバ私も御身の價貴き御血を以て贖はれた羊たるを記憶して、私を憐み給へ。世の人が殘らず私を打棄て、誰一人助けて呉れることも出來ない彼の恐るべき時にも、御身のみは私を慰め、救けること能ひ給ふので

あるから、願くは彼日に御身の聖体を、旅路の糧として拜領るの幸福を與へ給へ。御身を見失ひ、遠く地獄の彼方へ流謫されるの不幸に陷らしめ給ふな。愛すべき救主よ、決して〳〵さる不幸に遭はしめ給はず、御傷の中に私を庇ひ給へ。私は今より御身を抱き締め奉る。何卒聖心の御傷の中に隱れて、最後の息を吐き出すを得せしめ給へ。

耶蘇、マリア、ヨゼフよ、我心も、靈魂も御手に委ね奉る。

耶蘇、マリア、ヨゼフよ、臨終の苦悶の時、我靈魂を受取り給へ。

三、善死を願ふ祈禱、

慈愛の神にして哀憐の父なる耶蘇よ、今私は深く罪を愧ぢ、痛悔

の涙を飲んで、尊前に罷出で、死ぬ時と、死んで後の事を、慈愛の御手に托せ奉る。

我足動かずなりて、現世の旅行の將に終らんとするを告ぐる時。

憐深き耶蘇よ、我を憐み給へ。

我手痿れ、戰き、最早や十字架を握る能はず、心ならずも、之を苦しき臥床に落さんとする時。

全じく。

我目死の近きに亂れ暗み、消えかけた悲しい眺を御身に注がんとする時。

全じく。

我唇凍え振へて、御身の尊ぶべき聖名を、今を限りと唱へ奉る時。

全じく。

我頬蒼然めて色を失ひ、枕頭の人々に同情と恐怖との念を發さしむる時。　　仝じく。

我頭髪、最後の冷汗に濕ひて、我終焉の早や程遠からぬを告ぐる時。　　仝じく。

我耳塞りて、人の聲だ殆んど聞ゆずなりて、將に我が永遠の運命を決定むべき御身の宣告を聞かんが爲に開かれようとする時。　　仝じく。

我想像色々の怖ろしき妄念に襲はれて、死なん許りの悲痛に沈む時。　　仝じく。

我精神、數限りなき罪を思ひ出し、御身の嚴しき正義を怖れて亂

れ立つに乘じて、惡魔が私の眼を眩まし、御身の御哀憐を見せずして、只管私を失望の淵に突落さうとする時。　　仝じく。

我が孱弱い心が、病の苦痛に惱され、死の恐怖に壓倒され、救靈の敵には激しく攻め立てられて疲れ果つる時。　　仝じく。

我死の近まつた徵候として最後の涙を溢さん時、吁主耶蘇よ、之を我罪の償として嘉納め、私を懺悔の犧牲として死なしめ給へ。また其怖るべき時に當りて。　　仝じく。

我父母、朋友が枕頭を取卷き、私の痛々しい狀態を憐れがりて、私の爲に熱心なる祈禱を御身に獻げ奉る時。　　仝じく。

我五官、既に其作用を失ひ、世界は全く私の爲には消に失せて、

臨終の懊惱、死の痛苦に憂へ悶へる時。　仝じく。

私が最後の大きな溜息をつき、早く肉躰を出去れよと靈魂に逼らん時、其溜息をば、御身に飛附きたい心より逆つたものとして、之を受納め給へ。　仝じく。

我靈魂、現世を出去りて、後には青ざめて、冷たく、生命なき肉躰を遺し去らん時、我肉躰の崩壞をば、御身の限りなき稜威に捧げる拜禮の犧牲として受納め給へ。　仝じく。

終に我靈魂、尊前に咫尺き、始めて御身の光眩ゆき稜威の輝きを仰觀たてまつらん時、尊前より之を拒排け給はず、却て御哀憐の温かい懷に抱き入れて、永遠に御身の光榮を歌はしめ給へ。

祈願

仝じく。

ア、天主よ、御身は我等を死に處めながら、其時期を隱して知らせ給はなかつた。願くは我等に一生涯、聖い月日を送らしめ、終には御身を一心に愛しつゝ、幸福なる死を遂げるを得せしめ給へ。主と聖靈と共に生き且つ統治めし給ふ我等の主耶蘇基督の功德によつて願ひ奉る。アメン、

毎年の要務

年の靜修、

靜修の性質、

毎日一度、默想をし、毎月一日、靜修を爲し、又毎年一週間、或は責めて三日間なりとも靜修を行ふのは、罪を避け、德を修めて救靈を全うするが爲に極めて肝要である。苟くも基督信者の實を擧げようと思ふ人は、是非とも此の三つの務を缺がしてはならぬ。然らば靜修とは何であるか。

靜修とは、數日の間世にかけ離れ、物靜かな所に引籠つて、靈魂上の事に就て、獨り天主と物語るを謂ふのである。即ち默想し、痛

悔し、身を獻げ、熱心に祈り、天主の思召を伺ひ、其御勸を聽くなど、謂はゞ一種の默想で、特別默想とでも名くべき性質のものであらうか。

靜修の目的、

靜修は既に默想の一種であるとすれば、其目的も、默想のと別段違つて居ない。即ち天の聖光に浴びて己を識り、汚れた所を清め、曲つた所を直くし、弱つた心を引立てる爲、若くば天主の聖招を覺りたいと思ふ時、大切な職務を引受ける前、危險な旅行を爲すべき時、其他凡て特別の聖寵を求める必要のある場合に行ふのである。

靜修の利益

靜修は多人數集つて、説教師の指揮の下に默想を爲し、説教を聽いて行ふのはナカ〳〵善い。己が職務に忠實な司祭は、毎年一度の告白の準備として、必ず一村なり、一鄕なりの信者を集めて、三四日間の靜修をやらせる。人の心に惡を根絶やし、善を植附けるには、之に優る方法はないと謂つても過言ではない。然し司祭の都合で、それが出來かたい場合には、信者自身で行つても少からぬ利益がある。身獨りで、物にも人にも懸け離れて行れるから、何一つ耳障もなく、天主の優しい御聲、其聖い御勸も耳に入り易い。多人數一緒に行るよりか、時によつては却て益になることもある。孰れにしても、靜修を行ふ基督信者は、其都度、行自ら引締つて、德の途に

進まずと云ふことなしである。

天主は人なき里、物靜かな所に於てこそ搜す人にも遇つて下されば、語る人にも答へて下さるから、聖人等は常に野山に引籠つて、天主の御聲を聽き取らうと務められた。

聖ベルナルドの如きは、「自分が天主の事を識ることと出來たのは、教師に就き、書籍によつてよりも、寧ろ奥山の岩根、樹根で研究してゞある」とまで曰つて居られる。

所謂、人無き里とは必ずしも荒野原を指して謂ふのでない。自分の宅にも人無き里が無きにしもあらずだ。即ち數日間人に遠かり、靜かな室内に籠つて默想すれば、茲に立派な人なき里が出現れるの

である。

「然し他に靜修など行ふ人は無いのに！」と他人を憚るものがある。無用の心遣ひである。他人は他人、自己は自己、少と風變りの事を爲る位でなければ、天主の特別の愛を忝うすることは出來ない。

「異つたことを爲ずしては、聖德に達し難い」と聖ベルナルドも被仰つたでないか。

昔より靜修に由つて、惡を改め、善に立歸つた人の話は數へるに遑ない程である。今二つ三つ摘み擧ぐれば、

獨逸の某と云ふは、有ゆる罪惡に身を持崩した揚句、己が靈魂を惡魔に引渡さうと約束して、血判まで捺したのであるが、不圖した

序に靜修を行ひ、非常に痛悔の念を起し、悲痛の餘りに幾度も氣絕する程であつた。それからと云ふものは全く行を悛め、死する迄身を苦めて懺悔したと云ふ話である。

オランダの一少年も同じく靜修によつて、從來の不品行を全く改めて了つた、己が改心の餘り不思議なのを朋友が驚愕して居る樣子を見て、「私の改心を左程驚くのですか。然し私は斷言します、惡魔でも靜修を行ひ得たならば悔い悛めずには居れないでせう」と曰つた。

イタリアのシエナ町に一人の不品行な司祭が居た。或年のこと某の說敎師に勸められて靜修を行つた。すると忽ち己に反り、告白し

て行を悛めたのみならず、一日信者が聖堂に一杯充溢れて居る時を見計らつて、首には繩を掛けて、説教壇に登り、ハラ〳〵と涙を流しながら、信者に向つて、己が是迄多くの人を躓かした不心得を謝びて赦を願つた。後ではカプシン會に入りて修道者となり、聖い終を遂げたのであるが、臨終の時、繰り返し〳〵「自分の今日あるのは、全く靜修の御蔭である」と曰つたさうである。

靜修は啻に惡を改めるに有益なるばかりでない、善を修め、德を研くにも亦大に力になる。聖カロ、ボロメオはローマに於て始めて靜修を行つてから、完全の途に分け入られた。同じく聖フランシスコ、サレジオの天使見たやうに清く潔い生涯も、全く靜修の結

果であつた。實に、ルイ、ブロア靈父も、曰つた如く、靜修は天主が近世に至つて、公教會に敎示へ給うた珍寶で、我等は此の難有い賜を、特別に感謝して推戴かねばならぬのである。

靜修中の心得、

各個で靜修を行ふ時は、平生使用つて居る默想の書を以て、説敎の代用とし、別に靈的讀書用として、聖人傳若くは修德に關する書を一冊備へ置くべし。

靜修中は、天主の自分に望み給ふ所を悟りたいと務め、悟つた以上は、忠實に之に從ふ決心がなくてはならぬ。

天主の聖聲を聞取るが爲には、唯だ身体が人無き里に引込んだば

かりでは足りない。心までも現世の物事より引離さねばならぬ。故に靜修中は、なるべく世間に遠かり、始終沈默を守り、聖堂に參詣するか、或は疲勞を息める爲に時として散歩に出るかの他は、一切室より出ないことにせねばならぬ。聖フランシスコ、サレジオは、靜修中は書面さへ開けて見なかつたと云ふことである。

靜修の時間割、

時間割は、時と、場合と、其人の境遇とによつて異つて來るから、一定し難い。茲には唯だ一例を示すのみである。

朝、

五時か五時半、　朝の祈禱と默想（四終に就て）

六時か六時半、　ミサ聖祭、

七時、　朝食並に休息、

午前、

八時半、　コンタス、

九時、　靈的讀書、

十時、　默想並に休息、

十一時、　聖体訪問と特別糺明、

十二時、　晝食並に休息、

午後、

一時半、　コンタスパ

二時、
三時、
四時半、
夕方、
五時、
六時、
七時、
八時半、

時間の餘る分は、祈禱をしたり、書を讀んだり、受けたる聖光、定めたる決心を一筆錄したり、或は告白の準備を爲たりする爲に使

十字架の道行、
靈的讀書（聖人傳）、
御苦難の默想並に休息、
聖体訪問と死の準備、
默想（四終に就て）、
夕食並に休息、
夕の祈禱と糺明、

用ふ。

默想に就ての注意、

下に掲ぐる默想は、說教の如くには問題を敷衍してない。四終に關する格言の間々に感情を挿んだ位に過ぎないのである。これも必ず全編を讀んで了はねばならぬと云ふのではない。たゞ之を讀んで、靈魂の養料になると思ふ点を心靜に熟考へれば足りる。天主は時として第一點か、第二點かに於て、聖寵の光を與へ給ふことがあらう。其時は心に何物かを捕へる迄は、其處に止つて默想するが可い。必ずしも殘餘の分を讀んで了はうと焦るには及ばない。

終に默想の目的は、熱い涙をホロ〳〵と溢すやうな感情的信心を

覺ゐる爲でない。唯だ天主の聖旨を覺つて、是を忠實に行ふべき力を得るが爲である。この正しい意向がありさへすれば、よしや心は乾燥いて、退屈ばかり覺ゆる樣であつても、必ず天主の聖光に照らされて、其の難有い愛の熱に燃ゐ立つことが出來るであらう。

靜修の默想、

第一日、　救靈の大切なる事。

默想第一、救靈は我等の唯一の事業である。

(一)、何が肝要だと云つても、救靈の事業ほど肝要なのはない。我等が永遠に幸なるのも、不幸なるのも、一に此事業の結果の如何に因つて定まるのである。

主は曰うた「肝要なるは唯だ一つ」と、實に我等に肝要なのは唯だ一つである。財寶に充溢れるのは肝要でない。人に尊び敬はれるのは肝要でない。身躰の健全なのも肝要でない。唯だ肝要なのは靈魂の救濟一つである。天主が我等を現世に造り出し給うたのも、唯だ之が爲であつた。此目的を取外したものこそ誠に不幸である。

聖フランシスコ、ザベリオの聖言に、「現世では幸福と云ふ幸福は靈魂の救濟一つで、災禍と云ふ災禍も靈魂の滅亡唯だ一つのみ」とある。實際然うである。今は假令貧しくて、弱くて、人に侮り辱められても、何の損があるであらうか、靈魂さへ救かつたら、千代に八千代に窮りなき幸福が享けられるでないか。之に反して、身は

たとひ帝王となり、全世界を掌にし、千百萬人に號令し、有ゆる榮華を極めるとしても、後で其靈魂を滅ぼし、地獄に墮落することでもあつたら、其富、其爵位、其榮華、果して何の益があるであらう。

サテ〳〵自分の行末は如何であらう。救濟ることも出來れば、滅亡びることも出來るのではないか。苟くも滅亡びることが出來るとすれば、何故、今の中に固く主に結び着いて、離れも、滅びもしない樣にする決心を立てないのである。

あゝ主耶蘇よ、私を憐み給へ。私は行を悛めたい。志を立直したい。万望、私を援け給へ。御身は私を救はんが爲に態々死んでま

で下さつたのに、如何して私は自ら進んで滅亡の途に入られよう。

(二)、自分は今まで救靈の爲に充分働いたであらうか。今は早や地獄に落ちる氣遣はない、大丈夫だと枕を高うされるであらうか。

「人は何物を以てか其魂に易へん」、一たび靈魂を失つたら、假し如何なる珍寶を以てさても、之を償ふに足りないであらう。

見よ、聖人等が其救靈を安全ならしめようとして、如何ほど骨折られたかを。帝王皇后の尊き身でありながら、其の光眩ゆき玉座を捨て、いぶせき荒屋に引籠つて修道者となるとか、或は世に望多き青年でありながら、己が生里を離れ、父母の國を立去つて、遠く人無き野山に隱れるとか、或は又花盛りの處女でありながら、高貴の

方より雨の如に申し込んで來る縁談をふり切つて、身も心も潔く主耶蘇に献げるとか云ふ樣にした方々は、勝げて數へられぬほどである。ろれに自分は獨り何をして居るのである。

主耶蘇は自分を救はんが爲に如何なる事を成て下さつた。三十三年の長い歳月、備に艱難辛苦を嘗め、果ては價貴き御血さへ、二つとなき御生命さへ、惜氣もなく擲つて下さつた……斯くても自分は好んで滅びようとするのであるか。

主よ、御聖寵を失つた其時に、私を死なして下さらなかつた聖恩を感謝し奉る。若し其時にでも死んで居たら、私は如何成り果つべきであつたらう。

(三)、「神は一切の人の救はれん事を望み給ふ」されば若し万一救靈を失ふとあれば、之れ我等自らの過失で失ふのである。地獄の惡人の最も苦しう、殘念に思ふのは、即ち之だと云ふことである。

聖女テレジア曰はく「玩弄、裝飾品、寶玉類の如きすら自分の過失で失つた日には、殘念で〳〵堪らなく思ふほどであるのに、況して自分の過失故に、靈魂も、天國も、天主迄も殘らず失つたのだと思ふ惡人等の口惜さは誠に如何ばかりであらう」と。

サテも自分の終焉は日増に近いて來る。もう餘り遠くはない。で も永遠の生命を得んが爲に、自分は今まで幾何の働をして居る。思へば自分ほど愚なものがあるであらうか。罪を犯せば主の聖寵

を失ひ、地獄の終りなき苦罰を蒙るべき身となるのだとは、飽まで知つて居ながら、平氣で罪に罪を重ねたのである。主は自分の爲には尊ぶべき天主である、愛すべき救主であるとは萬々承知しながら、主を愛しようとも、尊びようともしないで、世の儚い財寶や、快樂やに曳かされて、主に背き參らしたのである。責めて今からでも犯した罪を一心に悔み悲み、萬事に超ゑて主を愛し、假令總ての所有は失ふとも、主の御親愛だけは失ふまいと決心せねばならぬ。

あゝ天主よ、私はもう幾年前から地獄に投げ込まれて、痛悔することも、御身を愛することも出來ない筈であつた。幸ひに猶だ兩つながら出來るのだから、私は痛く我罪を痛悔し、一心に御身を愛し

奉る。

默想第二、永遠の滅亡は輓回すべからず、

(一)、我等は何を當にして優々閑々と日を送つて居るのであらう。地獄に落込んで了つてから、幾ら血の涙を絞つて、「あゝ我等は過つた、欺された」と後悔した所で、所詮追附く話でない。一たび地獄に落ちてからと云ふものは、もう永遠に救かる見込はないのである。今は如何なる仕損事でも挽回が出來る。然し靈魂を滅ぼしてからは、もう如何とも手の附け樣はないであらう。

世の人は、僅かの目腐金を儲ける、煙の如な榮譽、夢の如な快樂を手に入れると云ふことには、實に感心する程善く立ち働く、如何

な工夫でも疑らし、如何な辛苦難でも嘗める、ナカ〳〵どうも感心でもあるが、サテ其靈魂を救けると云ふ段になると、片足を動かすのさへ大儀に思ふのである。靈魂の救からうが、救かるまいが何の損得もないものゝやうに……

身躰の生命を保全へんが爲には、如何ほどの注意を拂つて居るかを見よ。良き醫師を搜し、良き藥餌を求め、良き空氣を尋ねる。して靈魂の生命と來ては、如何ならうとも全く頓着なしである。

あゝ天主よ、私も是からは、如何樣の事があらうとも、御言に背くまいと云ふ決心である。今讀む所は、或は私を呼んで下さる最後の御聲であるかも計られないのに、如何して何時迄も耳を塞いで居

られよう。

(二)、我等が終りなき誅罰を蒙るのは最と易いことである。恐れて怖れないで居られよう。一刻も早く內心の紊亂を整理めないで置かれよう。

思へば主が自分を救けようと思召して、眞の敎會に生れさして下さつたのは、ろればかりでも實に大きな聖恩であるのに、更に主は自分を聖たらしめん爲に、說敎を以て、告白場に於て、他人の善言善行に由つて、如何ほど平垣かな路を自分の爲に開けて下さつた。靜修の時、祈禱默想の中に、聖体拜領の折に、自分を照して下さつた聖光は幾何であつた。自分を勸誘つて下さつた慈愛溢るゝ聖言は

幾何であつた。あゝ實に主の御憐の深くて、其御堪忍の强かつたことよ！。幾年の久しき自分の歸正を俟つて下さつた。幾度自分の罪を赦して下さつた。是れ皆な多くの人には與へて下さらなかつた特別の聖恩でないか。

主は必ず曰ふであらう「我葡萄園に我が作したることのほかに、何の爲すべき所あるか」と、如何に忘恩者とは云へ、我等も實に餘りではあるまいか。猶た此上にも、主の爲て下さるべき所が殘つて居るであらうか、幾年前より我等は現世に居る、して幾何の果を結んだ。

假令、我等自身に、救靈の方法を選む權を與へられたとしても、

主の授け給うたのよりも更に確實で、更に容易い方法を發見し得たであらうか。

然し我等が若し是等の方法を善く利用はず、折角主の賜うた聖寵を無駄に費すやうでもあつたら、聖寵は我等の爲に却て仇となりて、我等は一段と悲慘な死を遂げねばならぬ運命に陷るであらう。

我等が行を修め、德を研いて聖人となるが爲には、必ずしも異象を見たり、奇蹟を行つたりする必要はない。唯た我等の手許に具つて居る方法のみで足りる。卽ち毎日默想をし、屢々聖體を拜領し、修德用の書を讀み、罪の危き機會を避けたら、それでもう充分に完全の人となれるのである。

あゝ天主よ、私が現世に生れ出てから既に幾星霜？して何の得る所があつた。いかに最愛の耶蘇よ、私の怠慢を赦し給へ。私の頼む所は、唯だ御身の御血と御死去とである。

(三)、自分は今死なねばならぬと云ふならば、今日までの生活に就て氣遣ないであらうか、安心して死なれるであらうか……否決して……然らば何時まで斯うして居ようとする？今いよ〳〵死ぬと云ふ段になつてから、幾ら狼狽へ騒いで「吁我事休る、何一つ爲て居ないのに！」と嘆息した所で、後悔は後に立たず、何の甲斐もないであらう。

醫師にも見棄てられた危篤の病人が、思ひの外、一ケ年も、否な

一ケ月でも生き延びること出來たら、如何に多幸に思ふであらう。今天主は願うてもない此月日を自分に與へて下さる。然らば如何して之を空しく過して可からう。

主よ、御身は今日迄も私に猶豫を與へて下さつたから、私は必ず御仁愛を無駄にしない考である。御身の望み給ふ所を命じ給へ、必ず滿足に果し申すであらう。私は死ぬ時を俟たず、今より一身を擧げて御身に献げ奉る。愛すべき耶蘇よ、私は大に御身に背いたのであるが、然し是からは復た御意を痛め奉ることなく、御身に背いたことを專ら痛み悲み、一心に御身を愛せんと決心！奉る。

默想第三、萬事を差措いて、救靈を安全ならしめよ、

（一）、時を失ふべからず。死はますゝ〳〵近いて來る。今日爲し得る所を、決して明日に延してはならぬ。今日の日は再び歸り來ない。

臨終の間際になると、大概の人が嘆息して、「あゝ自分は何故德を行はなかつた、なぜ善〳〵身を修めなかつた」と云ふ。油盡きて、燈火の將に消ようとする段になつてから、嘆いても何の益がある。

死に臨むと何人でも必ず言ふであらう、「この罪の機會を避けるに何の難い事があつた。この人の不足を堪忍ぶに何の面倒いことがあつた。この危い關係を斷つに、この志望を棄てるに何の六ケ敷い事があつた。而かも自分は難んじて思ひ切ること出來なかつた。今自分の運命は如何なるべきであらう」と

主よ、私を扶け給へ。私はセヌアの聖女カタリナと共に申し上げ奉る、「あゝ主耶蘇よ、爭で復罪が犯されよう。爭で復罪が犯されよう」、私は萬事を擲つて、唯だ御意を喜ばせ奉る樣務めたいものである。

（二）、終りなき生命を獲んが爲には、いかなる骨折も過分とは謂ふべからず。聖ベルナルドも曰つたでないか、「永遠と云ふ問題に就ては、世に安全と云ふ安全はない」と。實に地獄の終りなき苦罰を遁れるか、天國の窮りなき福樂を贏ち得るかと云ふ大問題であれば、如何に用心したとて過分とするには足りないであらう。

救靈を安全ならしめるには、救靈の方法を實行ふ決心がなくては

ならぬ。心積ばかりは何の益もない。「後で爲よう、後で爲よう」と云ふのは最も危險だ。地獄に苦んで居る靈魂等は、皆な斯う云ひ云ひ滅んだのである。彼等は「後で、後で」と差延べて居る間に、圖らずも無常の風に吹き捲られて、哀れ地獄にさらひ込まれたのである。

聖ポーロは曰つて「汝等、懼れ慄きつゝ、己が救靈を全うせよ」と、實にも救靈の事は戰々競々として勤め勵み、一日でも心を安んじてはならぬ。斷じて天主に頼りすがり、心して罪の機會を避けるが肝要である。救靈の道は之に外ならぬ。

救靈を全うするが爲には、强ひて務力めねばならぬ。天國は懶者

の入るを許さない。自身に無理をしても、强ひて努力めるものだけが之を取る。

主よ、私は幾度も御身に誓約しながら、其誓約を空にして一つも守らなかつた。然しもう是からは決して御身に背くまい決心である。私を援け給へ。御身に背かんよりは寧ろ今潔く死なしめ給へ。

(三)、「願へよ、然らば與へられん」、この聖言こそ、我等を救けたき主の御望の如何に烈しく在すかを表はして餘りあるのである。人其友に向つて「卿の欲する所を請はれよ」と曰はば、他に言ふべき所があるであらうか。然らば絶えず主に祈るが可い、必ずや、新なる聖寵を溢るゝばかりに被つて、靈魂の救濟、疑なしであらう。

いかに愛すべき耶蘇よ、この拙き私の上にも御憐の眦を廻らし給へ。私は御身を忘れて居たのに、御身は私を忘れ給はなかつた。御慈愛の程感謝に堪へない所である。今よりは心を盡して御身を愛し、御身に背いたことを何よりも痛み悲み奉るであらう。主よ、赦し給へ、罪を以て御身に加へ參らした狼藉を赦し給へ。御身は私の虚弱いのを知召し給へば、私を見棄て給ふな。私を照し、強めて、行手の途に横つて居る千百の障礙を打破る力を與へ給へ。私に萬事を忘れて、たゞ〳〵御身の御慈愛、御愛憐、其の數限りなき聖恩を思ひ出さして、餘儀なくも御身を愛せしめ給へ。

天主の聖母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ。

第二日、浮世の儚い事、

默想第一、浮世の財寶は虚僞である、

(一)、「人たとひ全世界を贏くとも、もし其魂を失はゞ何の益かあらん」、是れぞ之れ千萬年の後までも、赫々たる光を放つて暗黑に彷徨つて居る世界を照らす金言で、此金言が幾多の人を天國に昇らしめ、幾多の聖人を聖會に産み出して呉れたか知れない。實に浮世は終りがあるが、魂には終りと云ふものはない。終りあるの浮世を殘らず贏け得ても、終りなきの魂を失つたら果して何の得る所があるであらう。

浮世！あゝ浮世！浮世とは何ぞや。空しき幼影！變り行く舞臺の

一幕のみ。聖ポーロは曰つた、「此世の態は過ぎ行くなり」と、然り、死來り、幕落ち、舞臺閉ぢると、萬事は茲に了るのである。

臨終の間際になつて、物悲しき死の陰影が射し込んで來ると、浮世の事物はすべて如何に映るであらう。今は何も彼も殘らず打棄てねばならぬと思へば、價貴き器物も何かあらん。山なす財寶も何かあらん。黄金の樓閣、珠玉の建物も夫れ將た何かあらん。

あゝ主耶蘇よ、私の身は今より全く御身の所有となし、唯だ御身をのみ愛せしめ給へ。浮世の財寶だの、快樂だの云ふものは、死ぬ時には據所なくも離れねばならないのだから、寧ろ今潔く之を打棄て、全然顧みもしない決心である。主よ、願くは聖寵を垂れて此

決心を固め給へ。

(二)、聖女テレジアも曰つた如く、終りある所のものは、齒牙に掛くるにも足りないのだから、基督信者たるものは、歳月と共に過ぎ去つて了ふ如き憂ひのない財寶に、平生眼を注がねばならぬ。よしや天主の外に福樂が得られるとしても、其福樂が持續のするのではなく、やがては窮りなき禍殃が身に落ちかゝつて來るものとすれば、其福樂に何の價値があるであらうか。

浮世の貨財でも、名譽快樂でも、之を臨終の床で眺むれば、全く夢の樣なものである。夢に帝王となつても、醒めては依然哀れな乞食であるのを見たら、如何に失望するであらう。

あゝ天主よ、今私の讀んで居る此默想は、私を呼んで下さる最後の御聲ではあるまいか。願くは現世を去らない前に、浮世の情愛を全く切り棄てる力を與へ給へ。今迄この汚らはしい情愛に絆されて、幾度となく御身に背き、御身を打棄て申したのは、如何に罪深い業であつたかと云ふことを明に悟るを得せしめ給へ。

「父よ、我は最早や汝の子と呼ばるゝに足らず」、實に私は罪に罪を重ねた放蕩兒で、御身の子と呼ばれるに堪へないのである。然し私も今は漸く迷夢の目が醒めて、御身に背いた事を一心と悔み悲んで居る。敕し給へ。主よ、赦し給へ。心より痛悔して父の家に歸り來た此放蕩兒を拒排け給ふな。

(三)、最後の折りに、基督信者の何よりの慰藉は、高い位に昇り、多譽の職を勤め、供從を多く隨へ、財寶は岡と積み、山と重ねて居たことでもなければ、榮華の暮をして、何の心配もなく、面白う、可笑しう世渡をしたことでもなく、人に優れ、世に時めき、英名を天下に轟かして居たことでもあるまい。最後の折りに基督信者の何よりの慰藉は、主耶蘇を心より愛して、其御爲に艱難苦勞を堪へ忍んだことであらう。

西班牙王ヒリッポ二世は死に臨んで嘆息して曰つた、「朕は王たる代りに、修道院に入つて修士とでもなつて居たらば！」と、其子のヒリッポ三世も亦臨終に當つて叫んで曰つた、「あゝ朕は、野山に引

籠つて隱遁者となつて居たらば、如何に心安んじて神の裁きの庭に進出るであらうに！」と。現世での果報者よと、我も思ひ、人も許して居る帝王ですら、いざ最後と云ふ段になると、其の言ふ所は實に斯の通りである。

之を要するに、浮世の福樂と云ふものは、臨終の折りになると、地獄の終りなき苦罰を憶ひ出させて、良心の譴責を一入强く感じさせ、徒に憂慮、恐怖、苦悶を增すばかりである。其時に至れば、兼々浮世の慾に愛着つて、其靈魂を忘れて居たもの等は必ず叫ぶであらう、「あゝ自分は浮世と手を斷る樣、數々の聖寵を辱うしながら、猶は戀々として之を慕ひ愛し、甘々と其口車に乘せられ、其誘惑に

從つて居たのである。今となつては如何なる宣告を受くべきであらう。サテも自分は何と云ふ馬鹿げ方をしたのである。身を修めて聖人とでもなるのは容易いことであつた。方法は幾らも備つて居た。天主と和親いで幸福なる月日を送ることは、實に何よりも易かつたのである。責めて今からでも心を改めたい。時日がないであらうか……」と、血の涙を飲んで後悔するであらうが、然し彼等が此の哀れな懺悔をするのは何時であらう。最早や現世の舞臺を起つて、終りなき未來に引込まんとする其危機でないか。幸か、不幸か、終りなき歡樂か、窮りなき失望かの決定らうとする其間際でないか。

主よ、私を憐み給へ。私は今まで御身を愛しなかつたけれども、

今からは御身を唯一の樂、唯一の寶として愛慕し奉るであらう。あ
あ最愛の天主よ、我が二つとなき寶よ、滿腔の情を傾けて愛し奉る
べきものは、唯だ御身ひとりである。御身の外に亦何の愛すべきも
のがあらう。

默想第二、浮世の財寶は持久がしない、

(一)、「あゝ地獄の淵底に苦み悶へて居るもの等よ、今其處には、
汝等が靈魂を忘れ、天國を忘れて積み貯へた財寶、名譽の一粒でも
遺る所あるか」……「イヤ一粒でも……遺る所は唯だ責苦ばかり！
失望ばかり！万事は過ぎさつた、有るものは唯だ苦罰のみである。
是ばかりは何時迄も終ることなしであらう」。

憐なる彼等は曰ふのである、「驕慢は我等に何の益があつた。人の
前に誇つて樂んだ財寶は何の益があつた。帝王の尊位も、世界を驚
かした名聲も何の益があつた。すべて皆な影の如く消ね、煙の如く
散り失せた。遺る所はただ窮りなき苦罰のみである」と。實に死ぬ
と云ふ段になると、一生の間、恣にして居た福樂も快樂も、靈魂に
安心を與へないのみか、却て恐懼と耻辱とを招くのみである。

あゝ自分が現世の光を仰いでから今幾年になる。天主の御爲に働
いた所は果して幾何ある。思へば裏愧かしい次第ではないか。主よ、
私を憐み給へ。尊前より追拂ひ給ふな。

死ぬ時は眞理の顯るゝ時である。死に臨むと人は現世の事物を有

の儘に認識むる。すべて皆な虚しいものだ、すべて皆な煙だ、灰だ、塵芥だと覺るのである。

あゝ天主よ、私は幾度現世の儚い事物に御身を交易へたのである。御身が私の罪を赦さんが爲に、忝くも死んで下さつたことでも思はなければ、如何して失望せずに居られよう。主よ、私の罪を赦し給へ。私は萬事に超えて御身を愛し奉る。全世界の財寶よりも御身の聖寵を貴重んじ奉る。

(二)、死は「盗人」と呼ばれるのであるが、實際死と云ふ大盗人が來たち、我等の有つ所のものは總て皆な强奪して了ふ。財寶も、爵位も、懐かしき父母兄弟も、美はしき容貌も、我等の皮膚までも、

悉く剝ぎ取つて殘す所なしである。

死の日は「喪失の日」とも呼ばれる。この日に、我等が一生涯汗水流して貯へた所も、今胸の中に描いて居る計畫も、抱いて居る希望も總て皆な喪失ふのである……嗚呼主耶蘇よ、私は浮世の財寶を失ふことは露ばかりも憂へない。御身は無上の寶で在らせらるゝから、御身をさへ失はなければ足りる。

聖人等が主耶蘇を愛して、現世の財寶を輕ぜられたのを、我等は口を極めて讃稱しながら、何事ぞ、自分は救靈の危險をも顧みず、之に執着で離れることと出來ないと云ふは。現世の儚い幸福は、前後を忘れて追ひ廻しながら、何事ぞ、後世の盡せぬ幸福の方は、全く

遣放にして顧みもしないと云ふは。

あゝ天主よ、私を照し給へ。現世の事物はすべて皆な虚無しく、唯だ御身ひとりが無上の寶に在すことを悟らしめ給へ。私は万事を抛つて御身を求め、唯だ御身を我が何よりの寶と抱き締めたいのである。主よ、愛すべき主よ、私は唯だ御身を望み奉る。唯だ御身ひとりを望み奉る。他に一つとして望む所なしである。

(三)、我等の罪過も、浮世の事物に執着く念も、畢竟之れ信仰の足りない所から發るのである。故に我等は始終信仰の熱を溫めて、一度は必ず一切の事物を棄て、永遠の住所に行くべき身であると云ふことを、片時も忘れないことにせねばならぬ。後では否でも諾でも

棄て措かねばならぬ事物であるが、今深く之に厭離れたら、少からぬ功德の種子ともなるのである。財寶が何である。名譽が何である。父母兄弟が何である。天主！あゝ天主！たゞ天主が有れば足りる。天主こそ我等の全でないか。

有名なるマルガリタと云ふ童貞は、獨逸皇帝ルドルフ二世の皇女で、カルメル會の修道女であつたが、平生人に語つて、「死ぬ時には、帝王の位も何にならうぞ」と曰うて居た。

聖フランシスコ、ボルジアは、イザベラ皇后の屍を見て、「サテも現世の權威も、爵位も斯く成り果つるのであるか」と、太い〳〵嘆息を吐いて、暫しは顏も上げ得なかつたが、終には世を捨て、專

ら天主に奉仕へる身となられた。

あゝ天主よ、私は如何して今迄も御身を愛しなかつたのであらう。願くは死ぬ前に是非とも私を御身の有となし、一心に御身を愛せしめ給へ。

默想第三、死は浮世の虛無を暴露す。

(一)、死と云ふ奴は何な秘術を知つて居るのであらう。浮世の有ゆる希望を忽ちにして煙と消え失せしめ、光眩き爵位でも、世界に又なき財寶でも、春の夜の夢、恃みがひもない幼影だと悟らせる。如何に人の目を惑す事物であらうが、一たび之を死の床から觀望めると、其色は褪め、其光は暗んで了ふ。實に死の暗影ばかりは、如

何なに美しい、華かな物でも曇らして了ふのである。

山なす財寶も何にしよう、嬢ては一枚の卷布で其の腐つた屍を包まれるに過ぎないのだと思へば。花の顏、月の眉でも何にしよう、嬢ては蛆虫の餌食となるのだと思へば。飛鳥落す權威も將た何にしよう、やがては北邙の露と消え失せて、誰一人思ひ出して呉れるものさへないのだと思へば。

金口聖ヨハネは曰つた、「汝墓に往つて、其塵を觀、其蛆を視て嘆息せよ」と、誰しも墓を覗いて、屍の蛆に喰はれ、塵になつて居る怖ろしい光景を觀望たらば、覺えず身振して叫ばずに居られまい、「あゝ自分も一度は斯う成り果つるであらうが、其んな事は想ひも

せず、身も心も天主に献げて、全く天主のものと爲り奉らうともしないのは、如何した譯であらう」と。

あゝ慈悲深き耶蘇よ、私は死ぬのを辞りはしない。思召の儘に、如何なる死でも與へ給へ。唯だ御身の判庭に進出る前に、私の罪を痛嘆くの餘裕を與へ給へ。いかに最愛の耶蘇よ、私は御身を愛し奉る。御身を愛するよりして、是まで御身を輕侮り凌辱めたのを、心の底より悔み悲み奉る。

(二)、サテ〳〵浮世の儚い財寶の爲に、其の虚しい榮譽、快樂の爲に、己が大事な靈魂を滅ぼしたものでろ可哀相である。彼等は其靈魂を滅ぼして、其一切を失つたのである。

我等は是非とも死なねばならぬ、死ぬのは而かも唯だ一度限りだと云ふことを信じて居るのであるか。もし之を信じて居るとすれば、如何して萬事を抛つて、善死を遂げるの準備をしないのであらう。今萬事を棄てたら、後では萬事則ち安全であらう。

臨終の時になつたら、自分の不行狀は堪へ難い痛恨の種子と爲るであらうとは萬々承知しながら、其不行狀を改めようともしないのは、如何した譯である。

主よ、御身が聖寵の光を掲げて私の心を照して下さつたのは、感謝に堪へない所である、然し御身は誰に何をし給うたのである。私は罪に罪を重ねた惡人であるのに、御身は聖寵に聖寵を加へて、私

を照らし、勸め、戒めて下さつた。斯はどの聖寵を若し正しく利用はないで、空に費すやうでもあつたら、如何な嚴罰を蒙つても足りないであらう。

己れ間もなく現世を立去るのだと思つたら、浮世を厭離れるのは難しくない。

アシジオの聖フランシスコの如く、萬の物をふり棄てながら、喜悅に堪へずして、「あゝ我天主よ、我萬よ」と絶叫ぶほどしの人ころ幸福である。其生や如何に平かで、其死や如何に安かであらう。

サロモン王ですら、「現世の財寶は虛しくて、徒らに心を惱ますばかりだ」と曰つて居る。實に財寶多ければ、憂も亦多い。

聖ヒリッポ、ネリオは、心現世に愛着して居る人を呼んで「狂者」と曰つたが、本當に狂者である、彼等は此世ながらに苦しい月日を送るのであるから。

あゝ天主よ、私は斯うまで御身に背いた以上は、何時も何時も激しい物煩と、恐ろしい良心の呵責とに苦しめられ、殊更ら臨終に際しては、一層激しく責立らるべきである。あゝ主よ、疾く〳〵私の罪を赦し給へ。私が御身の有となるのは御身の望み給ふ所、私も望む所であるから、私は今一身を擧げて御身に献げ奉る。私は全く御身の有となりたい。御身の外には何一つ望む所なしである。

(三)、萬事を拋つて、たゞ天主をのみ愛し奉るのは、世人の思惟

ふが如く、決して不愉快極るものでない。現世で本當の滿足と云ふものは、主耶蘇を一心に愛するものでなければ味ふこと出來ないのである。全世界の帝王の中を搜しても、身も心も潔く天主に獻げて了つた靈魂ほどに幸福なものが見附かれるであらうか。

自分は今現世を立ち去ると云ふならば、是迄の行動に就て安心されるであらうか、疚しい所がないであらうか……。否々……然らば何を賴にして斯う云ふ愚にもつかぬ事をして居るのである、主の哀憐の御手より戴いた數々の聖寵を空にして、何時まで立つても浮世を厭離れようともせず、心を傾けて主を愛しようともしなかつたら、審判の曉に至つて、「忘恩奴よ」と罵倒られても、口の開けやうがな

いであらう。

あゝ主耶蘇よ、私は萬事を拋棄て、一身を殘らず御身に獻げ奉る、私が御身を嫌つて、逃げつ匿れつして居た時ですら、御身は私を棄て給はず、後を追うて下さつた位であれば、今私の方から進んで御身を搜し求めたら、如何して拒排け給ふであらう。私が御身を愛しようとも、又御身に愛されようとも、つゆ心に浮べたこともない時ですら、私を愛して下さつた御身であれば、今私の方から進んで御身を愛したく、又御身に愛されたく一心に望んで居るのに、如何して私の望を空しうし給ふであらう。イカに慈愛の耶蘇よ、御身は私の救靈を何よりも望んで居なさるから、救靈の爲に立働くのは、

是れ即ち御意を喜ばせ奉る所以である。されば私は思召に從つて、我救靈を全うしたい。私は何も彼も放棄して、唯だ身を以て御身に殉ひ奉る。

天主の聖母マリアよ、私の爲に耶蘇に祈り給へ。

第三日、　永遠の旅路に就て、

默想第一、　我等は旅客である、

(一)、現世には我等の住むべき永存の都會はない、たゞ未來の都會を搜ねて進み行くべき身の上だから、行末長く斯土に止らうなんて夢にも思つてはならぬ、我等は旅客である。永遠の故郷に歸らんとて、暫く路を茲に借りた丈けである。

我等は間もなく現世を立去るべきである。間もなく我等の身体は墓に葬られ、靈魂は獨り永遠の住所に入り往くのである。

一夜泊りの旅の空に、己が財布を傾けて、廣大な家を建て、立派な屋敷を構へる旅客は、馬鹿でなければ、狂者であらう。

あゝ天主よ、私の靈魂は永遠に滅びることなしだから、御身を得ても終りなしである、御身を失つても亦終りなしである。

永遠には住所たゞ二つ。一つは總ての快樂の溢るゝ所、一つは有ゆる苦患の集る所で、兩つとも終りと云ふものがない。「樹は南に倒れても、北に倒れても、其の倒れた所に何時迄も止る」、と聖書にあるが、我等の靈魂も其れと同じで、幸にして救靈の港に錨を卸した

ら、窮りなき歡樂に安定くであらうが、もしや不幸にして地獄の淵にでも沈んだ日には、何時迄も浮む瀬なしであらう。然り何時迄も何時迄も、天主が天主にて在す限りは……

中間と云ふものはない。或は高く天上に攀ぢ登つて、何時迄も帝王となるか、或は深く地下に墮落して、何時迄もルシヘルの奴隷となるか、或は天國に於て、千代に八千代に窮りなき福樂を享けるか、或は地獄に於て、萬代までも失望して悶へ狂ふかである。

この二つの住所の中、孰れに我等は住むべきであらう。天國であらうか、地獄であらうか。ろれころ各自の望の儘である。孰れにしても、人は自分で往くので、行かせられるのでない。地獄に落ち行くのは、自分で好んで落ち行くのである。誅罰されるのは、誅罰されるのを望むから、誅罰されるのである。

あゝ主耶蘇よ、早くから御身を愛して居たら可かつたに、如何して御身を認めることの晩かつたのであらう。然し晩くても認め得ないのよりは優である。主よ、私は今御身を愛し奉る。御身は私の無上の福樂、永遠の家督、如何して一心と御身を愛せずに居られよう。

(二)、身を修め、德を研かうと思ふ基督信者は、絶えず永遠と云ふものを眼から離してはならぬ。永遠を始終も眼前に眺めて居る人は、其行狀が如何に端正うなるであらうか。

よしや天國、地獄、永遠などの教理に疑はしい點がありとするも、

猶は畢生の力を絞つて、萬一にも終りなき滅亡の危險に陷らないやう勉むべきであらう。況して是等の教理には、一點の疑でも挾む餘地がないのみならず、固く信ぜねばならぬ信仰個條ではないか。

幷も現世の榮華と云ふものは、何處まで存續くのである。長くて葬式の塲を越ねない。漸く冷たい一基の石塔に其俤を止めるのみである。何と傷ましい限りではないか。たゞ永遠の生命を得た人こそ誠に幸福の至りである。

いかに最愛の耶蘇よ、御身は我生命、我財寶、我愛であらせられるからは、願くは餘命の有らん限り、御心を喜ばしたい願望を大に私の心に燃やし給へ。又この願望が空な願望だけに止らずして、

實際之を私の言語行爲の上に實現すだけの力をも添へ給へ。

(三)、永遠の觀念は、人をして聖人とも爲らしむるに足りる。聖アウグスチンは、永遠の觀念を呼んで「一大觀念」と曰はれた。此觀念こそ幾多の青年を驅つて修道院に引籠らせ、幾多の隱遁者を人なき荒野に住はしめ、幾多の殉教者を刑塲に送りやつたのである。

アビラの福者ヨハネは、浮世の慾に搦まつて居る一婦人に向ひ、「夫人よ『何時迄も』『終もなく』と云ふ二つの語を觀想られよ」と曰つて、之を改心さした。又一人の修道者は墓の中に潛んで、始終嘆息しながら、「あゝ永遠よ！永遠よ！」と反覆して居たと云ふことである。

最後の一息！あゝ實に最後の一息！我等の身に取つては斯一息より大切なのが又とあるであらうか。快樂の永遠も苦患の永遠も、懸つて此一息に在り。此一息ごろ、終りなき福樂の生命、或は窮りなき禍災の生命の岐れる所である。此一息を善くさせたいと云ふばかりで、忝くも主耶蘇は十字架の上に死に給うたのである。

いかに最愛の救主よ、若し御身が私の爲に死に給はなかつたら、私はもう永遠に滅んで居たであらう。サテも愛すべき御君よ、私は謹んで御辭のほどを感謝し、今よりは唯だ御身を信賴み、たゞ御身を一心に愛し奉る。

默想第二、永遠の大事を思はぬ愚者、

（一）、我等は永遠の生命を信じて居るのであるか。信じて居ないのであるか。信じて居なければ、固より之が爲に立働く要はないが、苟くも信じて居るとすれば、如何ほど其爲に骨折つても過分とは謂はれまい。終りなき禍殃を遁れ、窮りなき福樂を手に入れると云ふ一大事であるからは。

某靈父の曰はれたことがある、「人若し永遠と云ふ、大事を善く〳〵認識り、現世の福樂と後世の福樂と、現世の禍殃と後世の禍殃とを天秤にかけて衡つて見たならば、誰一人として現世の事物を心配するものはなく、世界は忽ち草茫々たる荒野原となつて了ふであらう」と。

現世と後世との境界に立つて、「今こゝに我運命は決定るのである。救靈か、滅亡か、終りなき福樂か、際涯しなき禍殃か」と思ふ時には、何人か悚然として身の毛も森立たないものがあらう。

サテも光陰は矢の如く、一月と過ぎ、一年と去りて、間もなく我等は永遠の門口に立つべきであるが如何して露ばかりも其を心に念ひ浮べないのであらう。何人が知つたものがあらう、今年は、はた今月は自分の爲に終末の年月でもあるまいかと云ふことを。何人か斷言し得るであらう、今讀んで居る所が、天主の自分に與へて下さる最後の御警告でないと云ふことを。

あゝ天主よ、私は御身の聖寵を空にすまい考である。私はもう

身構して居る。私に御望を告げ給へ。何事であらうとも、腕打さすつて從ひ奉るであらう。

(二)、斯くまで顯著しい聖光、切なる御招を忝うしながら、我等は何時まで躊躇して居るのである。惡人と共に徒らに泣き號んで、「收穫の時は過ぎ、夏もはや畢りぬ、我等は救を得ざるに！」と太い〳〵溜息をつかうとするのか。今は過失も悔められる、仕損事も補修はれるが、死んだ後には、もう如何することも出來るものでない。

「終りなき生命を信じながら、罪を犯して天主に遠かるのを露意に懸ない基督信者は、精神病院にでも送りやるべきものだ」と、アビラ

の福者ヨハネは曰つて居る。

人の身に取つて、永遠の問題より大切なのはあるまい。家の間取の便不便、窓明の良否などの問題でない。快樂の大殿に住ひするか、苦患の淵底に溺沒れるか、天使聖人等と共に窮りなき福樂を享けるか、神の敵と打交つて其の失望落膽の苦を共にするかと云ふ大問題である。しかも斯が幾年の間の事であるか。百年の間か、否な。千年の間か、否な。何時迄も〳〵、天主が天主にて在す間の事である。

あゝ天主よ、私が若し聖寵を失つた時分にでも死んで居たら、それこそ永遠に滅びる筈であつた。さう云ふ禍殃に遭はなかつたのは、全く御身の限りなき御哀憐に因るので、私の感謝に堪へない所である。

從來の罪はもう全く赦されたものと安心して居るが、未だ赦されないのがありもしたら、今どうぞ赦し給へ。私は力を盡し、心を傾けて御身を愛し、御身に背いたことを何よりも悔み悲み奉る。以後は誓つて御身に背くまいと云ふ決心である。主よ、私は一心に御身を愛し奉る。又何時迄も愛し奉るであらう。たゞ主よ、私を憐み給へ。

(三)、審判、地獄、永遠などの薄氣味悪い語も、健かな人の耳には、さまで感動を與へまいが、一朝死に臨むと、如何に恐ろしく響くであらう。然しもう其時になつては、何等の益もないのみならず、却て良心の刺戟、不安の念を增すばかりであらう。

聖女テレジアは常に其童貞等に向つて、「少女等よ、靈魂は唯だ一つ、永遠も唯だ一つぞよ」と警めて居られた。實に靈魂は唯だ一つ、開を失つたら、萬事休る。永遠も唯だ一つ、斯靈魂を一たび失つたら、之れ永遠に失つたのである、もう全く取返しは出來ない。

主よ、私を罰し給ふな。却て御憐を垂れて、罪を嘆き悲む丈けの猶豫を與へ給へ。餘んの生命と云ふものは、悉く御身に獻げたい。何卒私を引取つて主の僕の中に加へ給へ、主よ、あゝ我が至愛の天主よ。

主は勘辨して埃つて下さる、實に感心するほどである。然し御憐の上より賜はる此時日を貴重にして、一分間でも徒らに費さぬやう

せねばならぬ。時が過ぎたら、血の涙を飲んで後悔しても、到底追附かないであらう。

臨終の時になると、一日、否な一時間の猶豫でも、金錢で買はれるものなら、千金を投げ出しても求めようとするであらう。然し其の貴重な一日若くは一時間も、頭腦が健全でなければ何の用にも立つものでない。所が臨終の時になると、大抵のものは、頭腦重く、疼痛激しく、胸逼迫りて、靈魂の働思ひに托せず、紊明も、痛悔も、信、望、愛の情も發されるものでない。宛ら手足を緊しく縛られて、眞暗い洞穴に打込まれ、四壁がめり〳〵と壞れかゝつても、遁れる術もなき哀れな囚人にも譬へれば譬へられるであらう。時日

を得たいと思ふであらうが、もう如何とも詮術ないのを見て、如何に失望するであらうか。

主は曾て我等を警めて、「人の子は汝等の思はざる時に來るべし」と曰うた。主が死ぬ時を秘して我等に知らせ給はないのは、始終、油斷なく、之に備へさせん爲である。死ぬ時は準備に取りかゝるべき時でない、準備はして了つて安心して竢ち設けて居るべき時なのである。聖ベルナルドも曰つた、「善き終焉を遂げようと思はゞ、絶にず死の準備をして居なければならぬ」と。

いかに愛すべき耶蘇よ、私は今日迄、數々の狼藉を御身に浴びせかけたのであるが、今はもう死の準備をすべき時であらう。何時ま

で御哀憐に甘ねて罪を犯されよう。私は有らん限りの力を盡して御身を愛したい。私は飽くまで御身に背いたから、飽くまで御身を愛するが至當である。

默想第三、時間の貴重な事、

(一)、兼ねて油斷をした報いに、今更ら心を悶躁いても、臨終の時期は刻一刻迫り來て、如何ともすべからざるを見たら、如何に心苦しう覺ゆるであらうか。

聖ロレンソ、ユスチニアノも曰つた如く、浮世に心を絆されて居た人に限つて、死に臨むと俄に狼狽へまはつて、己が財産を傾けても、責めて一時間の猶豫を得たいと焦せるであらうが、一時間さて

ろか、一分間でも與へられまい。「最早や時あらざるべし」と云ふ答を受ける許りであらう。「基督を奉ずる靈魂よ、疾く此世を去れ」、一刻も猶豫すな、疾く〳〵と促されるのみであらう。

聖ゲレゴリオ教皇の談によると、昔しグリゾリウスとか云ふ金滿家が居た。最後の間際に、惡魔から取圍まれ、恐ろしい聲を絞つて、「時をくれ明日迄、時をくれ明日迄」と連りに叫ぶと、惡魔は冷笑つて「馬鹿奴、時は呉れてあつたぢやないか。ナゼ無駄に費した。もう是迄だ。時はないと。答へたさうである。

あゝ天主よ、私は今日まで幾何の月日を徒らに費したであらう。責めて餘んの月日なりとも御身の爲に用ひたい、全く御身の爲にだ

け用ひたい。願くは罪惡に充ち滿つて居る私の心にも、主を愛する情を漲らし給へ。

時と云ふ時は、たとひ一分間であつても、殆ど限りなき價値がある。蓋し此一分間にでも、痛悔の念を起すか、愛の情を燃やすかすると、それだけ新に聖寵を殖やすことが出來るのである。

然し聖ベルナルトも曰つた如く、時は現世にしか見附からぬ寶である。「あゝ時さへあつたら」と地獄の惡人等は失望の聲を放つて叫んで居る。「あゝ時さへあつたら、永遠の滅亡が挽回へされように！」と。思ふに天國には悲もなく、嘆もない。然し天國の福者等が、もし万一悲み得るものとせば、生きて居る間に時を貴重にして聊

にても無駄費をしなかつたらハ猶ほ一層高い榮福の段に攀ぢ登られたらうにと嘆き給ふであらう。

あゝ我が愛する救主よ、私は一通りの惡人でないから、御赦を蒙るにも堪へないのであるが、偏に御苦難の功德に賴り靠り奉る。今、篤く御身を愛すると、後天國に於ても愈々篤く御身を愛することを出來るのだから、私はこれを一心に望み奉る。主よ、私を憐み給へ。私は淺間しい罪人ではあるが、今より全く御身の有となりたい。ただ御憐を垂れて私を援け給へ。

(三)、準備も爲て居ない時、不意に死ぬ樣な事はあるまいか。今まで頓に死んだ人々と雖も、自分では斯う云ふ最後を遂るであらうと

は誰一人思つて居たものはあるまい。彼等もし不幸にして、大罪を一つでも抱て居たとすれば、其行先こゝろ思ひ遣られて哀れではないか。

聖人等は、一生涯汲々として死の準備に骨折つてさへも、猶ほ安堵することを能きなかつたのである。アビラの福者ヨハネの如きも、臨終に際しては太い嘆息をしながら、「今少し時間があつたら、充分に準備をしようものに！」と叫ばれた位である。

聖人等ですら然うである。ろれに我等は何を賴にして高枕で安心して居るのである。哀れな、不安心極まる最後を遂げて、神の正義の恐ろしい般鑑ともならうとするのであるか。

あゝ主耶蘇よ、私を見棄て給ふな。主の御望を私に告げ給へ。聖旨とあれば、如何な事でも飛び立つて行らうと云ふが私の決心である。たゞ御身を一心に愛するを得せしめ給へ。私の願望は實に之れ一つである。

(三)、「我前に月日を喚び出せり」、恐ろしい事でないか。今憐みの御手より賜はる此月日も、一度は必ず我等の前に喚び出されるであらう。其時「負恩奴」と云ふ汚名を負はされて、地獄へ突落されないやう注意せねばならぬ。主は曰うた、「汝等、光を有する間に歩め、誰も業を爲す能はざる夜は將に來らんとす」と、死ぬ時は夜である。夜は物を見ない。働くべき時でない。

「自分は果して救靈ることと出來るであらうか、地獄に罰されはすまいか」と叫んで、聖アンデレアノは戰慄かれた。戰慄いて益々天主に密着されたのである。然るに我等は如何である。死去や、審判や、永遠や等が行手の途には竢ち設けて居ると信じながら、如何して一身を擧げて主に献げて了はないのである。

主よ、あゝ十字架に磔けられ給ふた最愛の耶蘇よ、私は最後の間際を竢たず、今より御身をかい抱き奉る。しかと我胸に抱き締め奉る。今より萬事を抛つて、唯だ御身を、唯だ御身ひとりを我が無類の寶と愛慕し奉る。

我が愛しの聖母マリアよ、私を御子耶蘇に愛着させ給へ。何時迄

も其聖愛より離れざらしめ給へ。

第四日、罪に就て、

默想第一、大罪の醜悪、

(一)、大罪とは何ぞや。大罪とは天主に身を背けることである。天主の聖寵を輕じ、其聖愛を侮ることである。大罪とは天主に向つて、「私は御身に事へたくない。私は我儘氣儘に擧動ひたい。聖意に扞ふとも、御身の敵とならうとも厭ん所でない」と、面りに天主を詬罵ることである。

大罪の醜悪を悟るが爲には、天主の如何に稜威尊く、又た其天主を凌辱しめる人間の、如何に身元卑賤しい者であるかを想はねばな

らぬ。然らば天主とは如何なる御方ぞ。天主の尊前にば、彼の天使聖人等ですら、有りて無きが如くである。然るに虫けらにも等しき人間が、斯くも尊い天主に抗ひ奉る大膽さよ。

人が大罪を犯す時は、啻に彼の御威光かがりなき天主を輕侮るばかりでない。猶ほ自分を愛して、自分の爲に恭くも其御生命を拋つて下さつた恩愛篤き主君を凌辱しめるのである。大罪の悪むべきは實に斯の如し。地獄の終りなき苦罰を以てしても、如何して一つの大罪でも償ふに足りるであらう。

嘗に思へ、人が大罪を犯すときは、何を爲ようとするのであるか。煙のやうな名譽を天主にも超えて愛するのでないか。其の憤怒

の情を、若くば其の愧づかしい快樂を天主よりも重んじて、天主を濟し奉るのでないか。天主は限りもなく稜威尊い御君なるに！量りもなき慈愛の溢るゝ御父なるに！

主よ、私は御身が十字架に磔けられて、私の爲に犧牲となつて下さつたことでも思はなければ、如何して失望せずに居られよう。私は唯だ御身の御死去に深く信頼み、謹んで我靈魂を御手に托し奉る。御身は此靈魂を救はんとて、御血も御生命も犧牲として下さつたのである。願くは私に心の底より御身を愛させ、以後は決して御身を失ふことなからしめ給へ。

あゝ我頼、我愛の御主よ、我無上の寶に在す耶蘇よ、私は御身

を愛し奉る。斯くまで難有い御慈愛を辨へながら、如何して再び御身に離れること出來よう。

（二）、數々の恩惠の露に潤ひながら、其恩惠をば打忘れて、却て我に仇するのを見るより心苦しいものはない。天主は固より悲哀も苦痛も覺ゑ給ふのでない。然れども若し萬一覺ゑ給ふこともあつたら、己が二つとなき御生命までも拋つて救上げた人類より、無理非道に凌辱められるのを思ひ給ひては、悲痛の餘りに胸も張裂け、腸も千々に碎ける心地がし給ふであらう。

何が憎いと云つても、罪ほど憎いものがあらうか。百度も千度も咀ふべきは罪である。罪故に我等は恩愛の情篤き天主の大御心を、

如何ばかり痛め參らした。

あゝ永久に滅びたる靈魂等よ、地獄の猛火に燒けつゝある靈魂等よ、汝等が世に在る折りに、「罪は左しも惡事に非ず」と頑張つて居たのは今如何である、汝等が嘗めつゝある永遠の苦罰も、其罪に較べたら萬分の一にも當らないのだと云ふことは、今悟つたであらう。

されば何人であつても、「罪は左まで怖るべきものでない」と夢にも思つてはならぬ。天主は御憐限りなく在せども、斯罪を罰するに終りなき地獄の苦を以てし給ふでないか。加之、罪に冒瀆された る天主の正義を完うせんが爲には、天主自らが其の價貴き御生命を犧牲に供へ給はねばならなかつたでないか。

サテも何と云ふ人間の淺間しさであらう。地獄の苦罰ほど怖るべきものはないと云ふことは明に知つて居る、而かも其の怖るべき地獄に身を陷し入れる所の罪を怖れることを知らない。罪を赦すが爲に天主自らが、其聖血を漓め盡されたと云ふことも知つて居る、而かも猶ほ罪惡の泥中に沈淪んで出ることを知らない。格別、價値もない物品を失つてすら、悲んで〳〵心が亂れる。ろれに罪を犯して天主を喪ひながら、如何して悲哀極つて、胸も破れる心地がしないのであらう。

主よ、私は御身に有ゆる悲哀、痛苦を浴びせかけ參らしたにも拘らず、猶ほ痛悔の時間を與へて下さつたのは、感謝に堪へない所で

ある。あゝ我が愛する耶蘇よ、私は一心と罪を悔み悲み、萬事に超して御身を愛し奉る。願くは私の悲痛を一層大ならしめ、私の愛情を一層切ならしめ給へ。私が罪を悔むのは、敢へて地獄の罰を怖れる故でない。唯だ御身に、たゞ愛すべき天主に、たゞ限りもなく愛すべき天主に背いたからである。

(三)、近侍の臣にして、主君の御意に戻つたと云ふことを覺つた時は、如何ほど憂ひ悶へるであらう。今我等は罪を犯して天主に背いたのである。たとひ暫くの間にもせよ、其御親愛を失つたのである。それに如何して胸を痛め心を悲ませることもなく、却て枕を高うして笑ひ興じて居るのであらう。

過つて毒を飲んでも、身躰ころ死にもしようが、靈魂は怪我なしである。ろれでも人はナカ〳〵油斷しないで、万一にも其んな過がないやうにと注意の上にも注意をするが、靈魂を殺し、天主迄も失はしむる罪慾の毒を避けるには、兎角怠り勝である、格別用心しようともしないのは、如何にも不思議ではないか。

「罪を犯しても構やせぬ、後で告白したら救される」、なんて夢にも思つてはならぬ。ろれこそ悪魔が我等を陷れようとする穽である。可哀相にも多くの靈魂は此穽に陷つて、今正に地獄の底にもがいて居るのである。

あゝ天主よ、私も幾年前から地獄のドン底に悶へ苦んで居るべき

であつた。御身が今日迄も默忍べて下さつたのは、之れ實に私をして永久に御憐を讃め稱へしめ、且つ一心に御身を愛せしめん爲に外ならぬ。されば最愛の耶蘇よ、私は今謹んで御身を讃め、御身を愛し奉る。もう今からは如何やうの事があつても、罪を犯して再び御身に背くまいと決心し奉る。斯ほどの大恩を忝うしながら、復と御身に背くやうでもあつたら、何を以て御身に謝罪び入ることの出來よう。何の顏あつて、尊前に進出られよう。あゝ主よ、願くはさる禍に遭はしめ給ふな。

默想第二、天主の御憐を賴み過すな、

(一)、天主は御自身を畏れ敬ふものをば憐み給へども、侮り辱め

るものには情を掛け給はぬ、殊に天主の御憐を賴みにして罪を犯すが如きは、其の怖るべき罰を招く所以である。

これも其筈であらう。天主の御憐を賴みにして之に背くと云ふは、取りも直さず天主を愚弄るのである。天主を愚弄つて如何して罰を免れることと出來よう。天主は侮られ給ふものでない。

「ナニ此罪を一つ位犯しても、强ち救靈が出來ぬと云ふ譯ではなし」と、惡魔が誘かしても、必ずゝ耳を傾けてはならぬ。罪を犯せば、地獄に罰さるべき身となるのである。成るほど、强ち救靈が出來ぬと云ふ譯ではあるまい。然し地獄に罰されることも强ち出來ぬとは云はれまい。否な却て其方が容易いかも知れぬ。永遠に救かるか、

滅びるかと云ふ大問題でないか、「強ち」など言うて顧みもしないは
ど價値のない問題と思つてはならぬ。若しや惡魔の口車に甘々と乘
せられて罪を犯した日には、愈々地獄に罰さるべき身と成り果つる
のでないか。萬一其儘死んで了ふか、或は天主から見棄られる樣で
もあつたら、行先きは如何なるであらう。

あゝ天主よ、もう是からは罪を犯して御身に背くまいと云ふのが
私の決心である。私ほどの罪人ではなうても、地獄に投込まれて居
る靈魂は幾何であるか知れぬ。唯だ私に對してのみ御愛情をかけて
下さつた。私は何を以て感謝すること出來よう。今よりは、自己を
棄て、專ら御身に順ひ奉りたい。然り、全く御身に順ひ奉りた

い。私の所有物も、意志も自由も殘らず御身に献げ奉る。

「我は主の有なり、願くは我を救ひ給へ」、然り主よ、私を罪科より
救ひ給へ。地獄を遁れしめ給へ。いかに愛すべき耶蘇よ、私は御身
を愛し奉る。決して再び御身を捨て奉るまい。

(二)、聖人等の說によれば、天主が我等に赦し給ふ罪は、其數が定
まつて居る。定まつては居るが、我等は其數を知らないから、新に
罪を重ねたならば、其數が滿ちて天主に棄てられはすまいかと、始
終恐れて怖れねばならぬ。「天主が尙だ此上にも自分の罪を赦して下
さるであらうか」と思つたら、誰が心安々と罪を犯されよう。此の
安からぬ心こころ、我等が罪に落ち込まうとする所を引き止めて異れ

る力つよき轡である。此轡に引き止められて、漸く救靈の惠が得られるのである。

天主の聖光に強く照され、其聖寵の雨露を豐に蒙つて居るものは、亦うれ丈け天主に見棄てられはすまいかと恐れねばならぬ。聖トマス博士の說によれば、罪の輕さ重さは、平素戴いて居る恩惠の大小に應つて定まるのである。然らば兼々天主の山高き聖恩を忝うしながら、大罪を犯して之に背く基督信者こそ禍なる哉。何時天主に見棄てられて、重い〳〵罰に處せられるかも測られないであらう。

あゝ主耶蘇よ、私は今まで御身と根比べをしたのである。御身は私に哀憐を掛けようとし給へば、私は却て御身を凌辱め奉らうとし、

御身は私に有ゆる幸福を施さうとし給へば、私は却て御身に有ゆる亂暴狼藉を加へ奉らうとした。然れども主よ、然れども今はもう心の底より御身を愛し奉る。愛して愛して從來の狼藉を償ひ奉りたい。主よ、願くは私を照らし給へ。強め給へ。

(三)、大罪を恐れないものは、遠からずして之に滑り落ちる、必ず間違はない。だから力の及ぶ限り罪の危さ機會を避けるが肝要である。

猶ほ小罪と雖も、故意を以て犯さない樣、愼まねばならぬ。故意を以て犯す小罪は、たとひ靈魂を殺す迄には至らずとも、大に其力を弱める。隨つて誘惑の嵐が遽に吹いて來ると、之に抗るの力なく、

立ろに覆へつて了ふのである。

聖女テレジアは曰つて居る、「輕微い罪だからと云つて故意に犯してはならぬ。識りつゝ犯す罪は如何に輕小であらうが、惡魔の總勢よりも、一層我等に害するものである」と。

あゝ主耶蘇よ、輕くも、重くも、以後は決して御身に背くまい。私は如何しても御身を愛せずに居られないのである。聊にても識りつゝ聖意に戻り奉らうよりは、寧ろ死するに若かずと決心し奉る。御身は決して背かれ給ふべきでなく、偏に愛慕され給ふべきである。私は今より力を盡して御身を愛したい。たゞ主よ、私を扶け給へ。

默想第三、小罪に就て。

(一)、小罪を「輕微い罪、格別の惡事でもない」と思ふのは、トンデもない考違ひである。小罪と雖も、限りもなく尊び敬ふべき天主に背くのでないか。如何して輕微い罪と謂はれよう。

「ナニ救靈さへ出來たら充分だ」と云つて、平氣で小罪を犯すものが、世には少くはない。然し、さう云ふ心掛けでは、救靈もナカ〳〵覺束ないであらう。聖グレゴリオも曰つた如く、靈魂は最初に倒れた所に止ること能るものでない。漸々下へ〳〵と墜落らうとするのは自然の勢である。故に聖イジドルは斷言された、「小罪をつゆ心に掛けない人は、天主に對する愛情が足りない證據であるから、早かれ晩かれ一度は必ず其罰を蒙つて、遂には大罪の淵に滑り落ちるに

相違ない」と。天主も亦曾て福者ヘンリ、スソに誨へて曰うた、「小罪を恐れない靈魂は、思ひの外、大きな危險に差懸つて居るのである。小罪を怖れずして、永く聖寵を保持つことはナカ〳〵六ケ敷い」と。

チリデンチノ公會議の議決文によれば、天主の特別の御助力なくては、人は長く聖寵の位地に止ることゝ能きない。所が何の憚もなく小罪を犯して、悔悛の色も仄見ない人は、天主の特別の御助力を戴くに堪へないのであるから、何を頼みに立つて往かれよう。落ちて、倒れて、顛げるのは火を見るよりも瞭である。

あゝ主よ、罪に應つて、私を罰し給ふな。私が今まで聖意を痛め

參らした罪は數限りもないが、御哀憐を垂れて殘らず之を忘れ給へ。光明も愛護も決して〳〵遠け給ふな。私は今より行狀を改め、一身を擧げて全く御身に獻げ奉りたい。あゝ全能の天主よ、私を受附け給へ。私の心を新ならしめ給へ。

(二)、主は嘗て聖女アンゼラに曰うた「一際高き完德の道を歩むべく聖寵を蒙つて居ながら、其道を枉げて、普通の道に由らうとする靈魂は、必ず棄てられる」と、況して斯る聖寵を戴きながら、無遠慮に小罪を重ねるやうでは、天主に見棄てられるのも無理はあるまい。

小罪を犯して天主に背くのも恐れず、たゞ〳〵己が私慾を遂げよ

うとするのは、是れ取りも直さず、天主を以て左まで注意して奉仕へるにも及ばぬものと云ふに同じ。語を換へて曰へば、私慾の滿足を拋つてまでも、其聖意を喜ばせねばならぬと云ふ程に、天主は愛すべき御方でないと表白すのである。

聖アウグスチンは曰うた、「小罪を犯し慣れた靈魂は、天主の御眼には癩病者の如く見にるので、流石の天主も、之をかき上げて抱き締める勇氣もあらせ給はぬのである」と。

主よ、私は遠くから御身に見棄らるべき者であるのに、御身は今日迄も私を見棄て給はなかつた。御慈愛のほど感謝の至りに堪へない。されば主よ、私に力を添へて、この冷淡い心情を脱ぎ棄てるを

得せしめ給へ。今よりは、如何樣の事ありとも、識りつゝは一の小罪でも犯すまいと云ふ決心である。私は一心に御身を愛したい。イカに愛すべき耶蘇よ、私を援け給へ。私は唯だ哀憐の御腕に身を托し奉る。

(三)、惡魔はナカ〳〵奸智に長けて居るから、決して始めから人を大罪に引込まうとはしない。始めは細い〳〵毛髮で之を繫ぎ、次には細絲で之を縛り、終には大きな鐵鎖で之を括りあげて、全く己が奴隷として了ふのである。だから私慾と云ふ奴は、如何に細小くても、決して之に心を繫がれない樣、注意しなければならぬ。私慾に搦まつて居る靈魂は、或はもう滅亡んで居るか、或は早や滅亡の途

にさし掛つて居るかである。

實に某童貞女も曰つた如く、惡魔は多く攫むこと出來なければ、少し攫んでも滿足するのである。然し其の少し攫んだ所を以て、終には殘らず攫み取つて了ふに至るのだから、少しでも惡魔に爪をかけられないやう注意するが肝要である。

冷淡い靈魂は口より吐き出して了ふぞと、天主は嘗て曰うた「汝は冷くも、熱くも非ずして、溫きが故に、我は汝を口より吐出さんとす」と、口より吐出されるとは、天主から棄てられると云ふ義である。一たび吐出したものは、誰だつて復口に入れる勇氣はあるまい。

冷淡い心は、譬へば肺結核の如なもので、始めは格別氣にも附かぬ位であるが、次第に靈魂は瘠せ細り、力は衰へ、聖寵の勸誘も、良心の咎責も感じなくなつて、終には滅亡の禍を免れること出來ないのである。

あゝ主耶蘇よ、私を憐み給へ、私の負恩の罪を思はず、却て私の爲に淩いで下さつた數々の御苦痛を想ひ廻らし給へ。私は是まで聖意を痛め參らしたのを一心と悔み悲み奉る。あゝ天主よ、私は御身を愛し奉る。今よりは御身の御望とあれば、如何に面倒い事でも飛び立つて成し奉るであらう。サテも愛すべき主よ、たとひ今までは痛く御身に背いたにせよ、今よりは生命の有らん限り、唯だ一心

に御身を愛せしめ給へ。

我頼なる聖母マリアよ、私の爲に御子に取繼ぎ給へ。

靜修第五日、　死に就て

默想第一、　重病、

(一)、死なねばならぬ。早かれ、晩かれ、人は必ず死なねばならぬ。一代毎に、家にも邑にも、故い人は墓に下つて、新顔の人が入れ替はる。

我等は皆な頸に繩をかけて生れる、卽ち死刑の宣告を受けて生れるのである。如何ほど長壽をしても、最後の一日は必ずやつて來る。其一日の中に、最後の一時も亦必ずやつて來る。斯時も、斯日も既

に決定つて居るのである。

あゝ天主よ、今日まで堪へ難きを堪へて、私を誅罰し給はなかつた御哀憐のほどを感謝し奉る。私も罪を犯さない前に死んで居たら、如何に幸福であつたらうに！幸ひにも過失を償ふべき時日を與へて下さるからは、願望私を憐み給へ、御身の望み給ふ所を命じ給へ。私は萬事を差搦いて、只だ御身の聖意に從ひ奉るであらう。

二三年を出でずして、書く自分も、讀む汝も早や現世のものでないかも知れぬ。他人が死んで哀げな鐘の音の鳴り響くのを自分が今聽くが如く、何時しか他人も自分の爲に打鳴らされる鐘の聲を聞くであらう。死亡帳に故人の名を自分が今讀む如く何時かは自分のも

讀まれるに相違ない。一口で言へば、死は決して免るべきものでない。唯だ怖ろしいのは、死が一度限りであつて、一度死に損ねたら、得て取返しの附かぬことである。

今何人か來て自分に告げて、「いざ秘蹟を！死が迫つて來た、猶豫してはならぬぞ」と曰つたら、如何に驚愕するであらう。早速、父母も妻子も自分の室を出て、唯だ司祭一人が自分の枕頭に坐るであらう。

あゝ主耶蘇よ、私は死ぬ時を竢たず、今日より身も心も御身に獻げ奉る。御身は、「尋ねよ、然らば遭はん」と曰うて、進んで御身を求むるものをば、決して退けまいと約束し給うた。私は今御身を尋

ね奉る。私を退け給ふな。御身に遭ふの幸福を得せしめ給へ。あゝ限りなく善なる主よ、私は御身を愛し奉る。御身を望み奉る。御身の外に何一つとして願ふ所なしである。

(二)、百般の企圖、計畫に頭を惱まして居る最中に、不圖重い病に取附かれ、「足下の病は危篤い、いざ最後の準備を！」と云ふのを聞く時、惡人の心持は如何であらう。遽に周章て心を整理へようと焦るであらうが、時既に迫り、徒に狼狽へ騷ぐばかりで、何一つ成し得ないであらう。

其時になつたら、見るもの聞くもの總て皆な煩悶、恐怖の種子でないものはわるまい。今が今まで樂み傲つて居た榮華までが荊棘と

なつて、其心を搖き傷るであらう。其の醉ひばぐれて居た快樂も荊棘であらう。其の成功した事業も荊棘であらう。其の人に自負つて居た榮譽も、其の己を天主に遠からした朋友も、其の派出やかな裝飾も、皆な悉く荊棘であらう。何一つとして荊棘でないものはあるまい。

「あゝ自分は軈て現世を立去るのである。孰の永遠に入るであらうか、幸福の永遠か、將た禍殃の永遠か」と思ふ時には、如何なる感情を覺ゆるであらうか。兼て天主を忘れ、靈魂を忘れて、只管現世の慾に愛着つて居たのであるから、たゞ審判、地獄、永遠など云ふ語を聞くに付けても、全身戰ひ慄くほどであらう。

いと聖き救主よ、御身は私の爲にころ死んで下さつたのであるから、私は賴母しく思つて、偏に聖血の御功德に賴り縋り奉る。あゝ限りなき善なる天主よ、私は御身を愛し、御身に背いたことを何よりも悔み悲み奉る。御身は私の賴、私の愛にて在せば、願くは私を憐み給へ。

(三)、見よ、憫むべき罪人の重い病に臥つて、早や死に臨んで居る狀態を。前ほどまで大手を振つて人中を練り歩き、何の忌憚もなく、其慾望、惡言、嘲弄を逞うして、人毎に恐怖を抱かしめたるに引換へ、今は確と弱り果て、力なく、身動さへ自由ならず、口語らず、目視ず、耳聽かずなつた。

哀れ、彼が平素の企圖も、其榮華も、はや其胸には浮び樣もない。たゞ神の審判の恐るべき幻影が、何時とはなしに眼前に迫り來て、身の措き所も知らないのである。彼の傍には父母や妻子が居列んで居る、泣くもあれば、嘆息するもある、俯いて默つてるのもある。司祭は枕邊に立ち、醫師は幾人も立會つて小首を傾けて居る。何處見ても恐怖の種子ばかりである。

事こゝに至れば、流石の彼も笑ひ興じて愉快をしようなんて思ひも寄らない。たゞ右を見ても左を見ても、自分の病が到底も平癒る見込はないと告げる悲しい前兆に心を碎くのみである。

もう仕方がない。この混雜の中に、この痛苦、煩悶、恐怖の中に

現世を立つの準備をせねばならぬ。時は迫り、精神は千々に亂れる、如何して怖ろしい死出の旅路の用意をする事の出來よう。然れども遁るべき方法はない。如何で出發せねばならぬ。出來た事は、出來たまでゝ、今更ら如何することも出來るものでない。

あゝ天主よ、私の終焉は怎も如何であらう。私は斯る怖ろしい狀態で死にたくはない。是非とも行を悛め、德を積み、御身を一心に愛して、心安々と死なねばならぬ。愛すべき耶蘇よ、私を援け給へ。力の及ぶ限り御身を愛せしめ給へ。强い〳〵愛の絆もて、私を固く御身に結び着けて、永へに離れさらしめ給へ。

默想第二、臨終の祈禱と終油の秘蹟、

(一)、「今日汝は死ぬであらう」と云ふのを聞いたら、千金を投げ出しても、一ケ年、否な一ケ月の猶豫でも求めたいと思はぬものはあるまい。然らば只今より志を定めて、爲べき筈の所は速に爲して置くが可い。死に臨んでは何一つ出來難いであらう。誰か知つたものがあらう、今年は、將た今月は、否な恐らく今日は自分の終焉の日であるまいかと云ふことを。

自分は現今の狀態で死にたくはないと云ふならば、如何して現今の儘に月日を送らうとするのである。人が不意に死んだのを見ては、「可哀相に、準備する時日もなしに！」と氣の毒に思ふでないか。して自分は今この大切な時日を有つて居ながら、何故準備をしよう

と努めないのであらう。

主よ、私はもう愈々、心を入れ替へ、志を改めて、今後は御胸に刻まれてある私の名を、仕方泣く〳〵も御身が削り去り給ふ樣な惡事を働くまいと云ふ決心である。私に垂れ給ふた御哀憐のほどを感謝し奉る。私を助けて行を悛めしめ給へ。御身は私の救靈を望み給ひ、私も之を一心に冀つて居る。願望私を憐みて救靈の惠を得させ、永遠に御身を讃め、御身を愛せしめ給へ。

臨終に當つて、病人の手には十字架を握らせられ、「今となつては、獨り耶蘇基督ころ汝の唯一の信賴、唯一の慰安である」と告げられるであらう。然し平生より、十字架も尊ばず、主耶蘇も愛しなかつ

た人は、之を見たばかりでも、慰安は愚か、却て云ひ知れぬ恐怖を感ずるであらう。之に反して兼々キ耶蘇を愛し、之が爲に萬事を抛つた人に在つては、この十字架ほど嬉しいものはあるまい。

最とも愛すべき耶蘇よ、今も、臨終の時も、御身は私の天主、私の有ゆる財寶、私の有ゆる歡樂である。私は唯だ御身を愛し、たゞ御身を望み奉る。

(二)、心に罪の重荷を負つて居る病人は、「永遠」など云ふ語を耳にするばかりでも、身慄ひするのである。憐なる彼は、「病の辛さ」、「醫師」、「藥餌」などの外は語るを欲まない。靈魂上の事でも言ふものがあると、直に厭倦になつて、「願望暫く休息まして！」と曰つて、談

話を脇へ紛らして了ふ。時刻迫り、復如何ともされなくなつてから、辛つと目を醒して、「あゝ行狀を悔める時日があれば！」と嘆息して、多少の猶豫を求めようとするであらうが、「もう出發の時が來た、疾く立つて現世を去れ」との答を受けるばかりであらう。「今一度、他の國手を呼んで呉れ、他の療治を試みて呉れ」と頼んでも、「ナニ國手を！療治を！もう時刻がない、永遠に入らねばならぬ、疾く〳〵」と促されるばかりであらう。其時の心持は果して如何であらう。

「基督を奉ずる靈魂よ、現世を去れ」、兼々天主を愛して居た熟信者は、この「去れ」と云ふ命令を受けても決して膽を寒すことはない。却て自分が萬事に越えて愛して居る其寶を失ふ氣遣も、愈今日より

無くなるかと思つて喜ぶのである。

「願くは汝今日安樂の座を占め、天國の中に住居を得んことを」自分こそ天主の聖寵を保全つて居ると安心して死ぬ人の爲には、如何に心樂しい言葉であらう。

あゝ主耶蘇よ、私も彼の安樂の座に導かれ、喜極まつて「主よ、今よりは御身を失ふ憂慮もないぞよ」と絶叫ぶことが出來ねばならぬ。御身の價貴き御血の功德によつて、私は熟く之を望み奉る。

「主よ、僕の叫びを憐み、其涙を憐み給へ」。愛すべき天主よ、私は臨終の間際を俟たず、今より我罪を憎み嫌ひ、之を一心に歎き、之を死なんばかりに痛み悲むと共に、又心の底より御身を愛し奉る。

斯くて一生涯、愛しては歎き、歎いては愛して、身を終りたいと決心し奉る。

「主よ、彼は異れる神に造られし者に非すして、活ける眞の神なる主に造られし者なることを承認め給へ」。あゝ天主よ、私を見識りて受領り給へ。私は御身の爲にこそ造られたのである。私を遠け給ふな。たとひ今迄ば御身を輕じ申したにせよ、今は萬事に超えて御身を愛し奉る。御身の外には何一つ愛すまいと固く決心し奉る。

(三)、耶蘇基督を平生よく愛しなかつたものは、臨終の聖体を望見て、恐れ戰くであらうが、從來、主耶蘇の愛情に燃えきれんばかりであつた人は、辱くも主が永遠に赴く旅路の糧、途伴として、躬ち

自分の茅屋に臨み給ふのを見ては、希望に滿ち、感涙に咽ぶのである。

終油の秘蹟を授かる段になると、惡魔は、我等が五官を以て犯したるはゞの罪を憶ひ起さして、我等を失望の淵に突き落さうとするに相違ないから、今の中に罪を殘らず痛悔し、告白して、赦を受けることにして置かねばならぬ。

秘蹟を悉く授つて了ふと、父母も妻子も病室を退き去つて、病人ひとり十字架と共に遺されるであらう。

あゝ主耶蘇よ、臨終の時に、人は皆な私を棄て去るとも、御身だけは見捨て給ふな。私はたゞ御身ひとりを杖とも柱とも頼み奉る。

「主よ、我れ主に頼み奉りたれば、永遠に辱められじ」、

默想第三、臨終の苦悶と死去、

(一)、冷汗額に浴く、眼眩み、脈も殆んど搏止み、手足は凍りて宛ら屍の横つた樣、臨終の苦悶は遂に襲ひ來た。哀れ彼の運命は早や一瞬間に迫つたのである。

苦しい息の根は次第々々に細り來て、死期の近い徵候が顯はれて來た。司祭は祝せられた一本の蠟燭を病人の手に握らせ、臨終の祈禱を始める……あゝ神秘しき燭火よ、今我等の心を照らせ。爲した る惡事に藥を附ける餘裕の無い時になつてからは、汝の光も格別益になるまいから。

哀れ彼の蠟燭の悲しい光に照らしたら、浮世の儚さ、罪の重くて怖ろしいことなど、手に取るよりも明に見ゆるであらう。

終に彼は絶息した。ろの最後の一息こそ、彼が爲には現世の終で、來世の始であつた。幸福の永遠か、禍殃の永遠かは、實に此一息で決定つたのである。

主よ、耶蘇よ、私を憐み給へ。私の罪を赦し給へ。私を固く主に結び着けて、最後の日に滅びざらしめ給へ。

愈よ絶息れたと見るや、司祭は一座の人々に向つて云ふ「早や永遠の客と爲つた」……「もう永遠の客となつた？」「左樣！」……「安かに息めかし」。

天主と和親いでさへ死んだら、安かに息むであらうが、萬一聖寵を失つた儘でゞも死んだのなら、ろれこそ實に可哀相である。天主が天主にて在す限り、彼は安かに息み得ないであらう。

あゝ主よ、私は是まで幾度となく世の儚い快樂に曳かされて、御身の親愛も、聖寵も振棄てたのである。若し其折り私の生命を取上げてゞも下さつたら、何と云ふ哀れな次第であつたらう。私は今御憐のほどを深く感謝し、死する迄、御身に忠實に仕へんと決心し奉る。

（二）、死するや間もなく、訃音が遠近に散る。聞くものは思ひ〳〵に噂をするのである。「彼は正直な、良い人であつたが、餘り熱信家

ではなかつた」と云ふものもあれば、「地獄に罰されはしなかつたらうか」と危むものもある。親兄弟は悲哀を忘れようとして、成るべく彼に就て語るまいとする。一言彼の事を云ひ出すと、直に之を遮り沮めて、「萬望、彼の名を言つて下さるな」と願ふものさへある。サテ〳〵今が今まで交際場裡の華と謳はれて居た彼も、今は誰一人記憶ひ出して呉れるものもない。其名を言ひ出すのさへ遠慮するやうになつた。彼の室を訪ねても、彼はもう居なくなつた。彼の家、彼の家具、彼の財産も一切他人の所有となり畢つた。して彼は今何處に居るであらう？……肉躰は墓の中に！霊魂は永遠の世界に！

彼を見たければ、此土窟を發いて熟視よ。前の健全なる躰、元氣

らしい顔附、歡喜の色溢れたる彼ではなくて、もう全く腐敗の塊である。豊かな頰も、朱の唇も、蛆は遠慮なく喰ひ盡した。殘る所は唯だ腥い白骨のみである。ろれすち、時を經る儘に頭は頸と、四肢は胴と離れ〳〵て、全きものとては一つも殘らないであらう。

見よ、天主に背くのも厭はずして、撫で擦つて居た斯躰の成りの果を！

あゝ天國の聖人等よ、現世で肉躰を責懲らし給うた卿等は、如何に智賢かりしよ。卿等の遺骨は今や祭壇の上に祭り上げられ、霊魂は限りなき光榮を帶びて、天主を面りに打眺めつゝ、公審判の曉を待ち給ふのである。斯くて現世の苦痛を共にした肉躰と再び相合し

て、永遠無窮に天國の光榮、福樂を共にし給ふであらう。

主よ、私も聖人等に倣ひ、肉躰を打懲らして我罪を償ひ、御身を一心に愛し、後天國に於て、亦聖人等と共に、千代に八千代に御身を讃美したいものである。願くは御憐を垂れて私を顧み給へ。私の罪を赦し給へ。

(三)、自分は今永遠の世界に在るとすれば、「天主の御爲に何をして居れば可かつたに！」と思ふであらうか。

聖カミルロは墓を見て獨り自ら嘆息して、「この死人が甦つて再び世に出ること出來たら、永遠の生命の爲に如何な骨折でも謝辭りはせぬであらう。それに自分は今何を爲て居るのである」と曰はれ

た。本當に我等も永遠の救濟の爲に何を爲して居るのである。あゝ我等も何をして居るのである。

主よ、私は憎みても足りない忘恩奴ではあるが、御憐を垂れて、私を顧み給へ。他の人は暗黒の中に罪を犯したけれども、私ばかりは白晝に御身に背いたのである。罪を犯せば如何なる凌辱を御身に加へるかと云ふことも、萬々承知しながら、聖寵の御光照も、御勸誘も蹂躙つて、御身を凌辱め參らしたのである。然れども、「主よ、希くは御身わが恐怖の的となり給はずして、禍の日にわが避難所となり給へ」。然り主耶蘇よ、御身は唯一の避難所にて在せば、臨終の苦悶の時、私の恐怖とはなり給はず、却て何よりの信頼となり給

へ。

默想第四、　善人の死、

(一)、「聖者の死は主の尊前に貴し」。善人の死の貴き所以は、苦勞の終にして、生命の門口だからである。苦痛も、誘惑も、戰鬪も、其他天主を失ふの氣遣も總て皆な茲に終を告げるからである。

悪人の爲には、胸を抉られると云ふ「此世を去れ」の語も、決して善人を苦めるものでない。彼等には天主の外に財寶と云ふものは無いから、現世の財寶に離れるのは、少つとも苦しうない。名譽も平生より輕視して居たから、之を棄てるのも格別辛い思はしない。父母であらうが、妻子であらうが、天主に對してこそ愛して居たのである。之に訣れると云つても左まで悲しう覺える筈がない。彼等は常に天主を以て、總ての財寶、快樂とし、「我天主よ、我萬よ」、と云ひ〳〵一生を送つたのである。今は最後と云ふ段になつては、猶更ら喜んで其語を反覆すのみであらう。

臨終の苦悶すらも、彼等は痛苦いとは思はない。却て己が生命の最後の一息までも献げて、天主を愛するの赤心を表はすこと出來るのを幸福とするのである。彼等は實に主耶蘇が己を愛して、己が爲に献げて下さつた其の尊い御生命の犧牲に、己が生命の犧牲を配せて献げるのを、何よりも滿足に思ふのである。

あゝ主耶蘇よ、私は數々の罪を犯して御身に背いたものであれば、

さう云ふ幸福な死を遂げようなんて思ひも寄らぬのであるが、然し御身は私の爲に十字架の上に死んで下さつた。私はたゞ御身の御傷と御死去とに賴り靠り奉る。願くは御憐を垂れて私の罪を赦し給へ。御身を一心に愛せしめ給へ。

(二)、死すると直に、其日から、罪に誘はれる氣遣も、天主を失ふ危險も全く無くなるのを見て、善人等は如何に嬉しう思ふであらうか。十字架をかき抱いて、「我れ安然にして眠り且つ息らはん」と叫ぶ時の喜悅は、あゝ誠に如何ばかりであらう。

思ふに惡魔は我等の罪愆を眼前に陳列べ立て、懸念を惹起させ、我等を失望の淵に陷擠まうとするであらう。然し今の中に罪を嘆き

悲んでさへ置いたら、今の中に主耶蘇を誠心より愛してさへ置いたら、此の慈愛深き御主は、決して我等を見捨て下さるまい。主が我等の救靈を望み給ふのは、惡魔が我等の滅亡を計るのよりか遙かに優つて居るのだから、必ず我等を慰め、心を安んじ、氣を勵し、力を附けて下さるであらう。

加之、死は生の門である。天主は信實にして約束を違へ給ふものでない。されば此の危い最後の場合に、如何して平生己を愛して居た靈魂を慰め給はぬであらう。一方ならぬ憂慮、煩悶の中にも、如何して天國の云ひ知れぬ歡樂を、幾分なりとも心に感じさせ給はぬであらう。必ずや信賴の念だの、愛の情だの、天主を面りに仰視た

い望だのを發すにつけても、早や現世ながらに、天國の平和を味はして下さるに相違ないのである。又聖体の秘蹟は、特に聖ヒリツポネリオの如く、一目見るや忽ち、「あゝ我が愛する御者よ！あゝ我が愛する御者よ！」と絶叫ぶほどしの人に在つては、如何なる喜悅の種子となるであらう。

主よ、御身は我判事ではあるが、亦我救主で、私を救はんが爲に、御生命までも抛ち給うたのである。願くは私を憐み給へ。御手を伸べて罪惡の中より私を救ひ上げて、御身を一心に愛するを得せしめ給へ。

（三）、是に由つて之を觀れば、死は決して恐るべきものでない。た

だ恐るべきは死を禍ひならしむる罪科である。されば聖コロムビエル靈父も曰つた如く、一生涯、忠實に天主に事へた人で、哀れな死を遂げると云ふは、決して有り得べき事でない。

天主を愛するものは誠意より死を希ふ。死ねば其の愛する天主の尊前に行くのである。永遠に天主と結合されるのである。愛する人と一つになるのを希はぬものはあるまい。早く天主を見たい、早く天主に抱き附きたいと望まないのは、天主を厚く愛しない證據である。

我等は今斷然、心を一切の事物より引離して、死を甘んじ受ける覺悟をせねばならぬ。今浮世の事物に離れるのは功德になるが、後

で餘儀なく離れては、何の功德もないのみならず、大に靈魂の爲に危い。されば是からは、毎日々々今日を限りと思つて暮すことにしよう。死を眼前に眺めつゝある人は、其行狀いかに端正うなるであらう。

あゝ天主よ、御身を面りに仰視て、一心に愛し奉る曉は何時到來するであらう。私は此幸福を享けるに堪へないが、唯だ御身の御傷に賴り靠り奉る。主の御傷こそ實に私の唯一の希望である。此希望に屬されて、私は聖アウグスチンと共に、「いざ主よ、いざ疾く死して御身を仰視たてまつらん」と申上げ奉る。然り、愛すべき耶蘇よ、私は疾く死んで、御身の聖顏を仰視奉り、御腕に縋りつい

て、御身を離れる氣遣もなく、安心して終りなく樂みたいものである。

あゝ聖母よ、私は御子の聖血と、御身の御傳達とに深く賴り奉る。何卒私に救靈の恩惠を得させ、天の御國に於て、永遠に御身を讃美し、感謝し、愛慕するの幸福を得せしめ給へ。アメン。

第六日、　審判に就て。

默想第一、　私審判、

(一)、自分は今ま死苦に惱んで居る、自分の生命も早や一時間か二時間かに縮つて來た、自分は軈て主の法庭に出頭て、一生涯の善惡に就て糺問されねばならぬと想像せよ。果して如何なる感がするで

おらう。其時に當つて、我等の爲に何よりも怖ろしいのは、罪惡に汚れた心であるに相違ない。然らば其の糺問の日の來ない前に、心の汚點を洗ひ清めて置かねばなるまい。

其日ころ永遠の世界に入るの日である。犯したる罪に對する良心の刺戟、惡魔の惹起す失望の念、申渡さるべき判決の覺束ないことなどで、あゝ靈魂は如何に亂れ騷ぐであらう。されば今より耶蘇とマリアとに固く愛着して、我等の運命の定まるべき彼の最後の日に、見棄てられないやう心掛けるが肝要である。

二三分の後に、主の審判を受けねばならぬと想ふ時の恐ろしさは如何であらう。聖女マダレナ、デ、パージ嘗て病に臥つて、わなゝく

と戰へて居た。司祭が不思議に思つて其故を問ねると、聖女は答へて、「主の法庭に召喚されると云ふは怖ろしい事で御座らんか」と申された。幼き時より孜々として善を修め、德を積みて、天晴の聖女よと謳はれて居た此の罪無き童貞でさへ斯く恐れたと云へば、數限りもなく罪を重ねて、幾度も地獄の薪となる筈であつた我等は、如何に怖ろしいことであらう。

いかに愛すべき耶蘇よ、私も御身の價貴き聖血を以て、購はれたるものなるを記憶に給へ願くは彼の審判の日の來ざる前に私を憐み給へ。御身に背いたことを心の底より悔み悲んで居る此の卑しい下僕に救し給へ。

(二)、神學士等の說によれば、息の根の切るゝや否や、直と其場で裁判開かれ、宣告下り、賞罰執行はれると云ふことである。

嗚呼、こゝを乞れ我等の運命の決定る時である。我等一人宛が永遠に幸なるも、不幸なるも全く斯時に決定るのである。

ルイ、ヅポンと云ふ靈父は、其時の事を想ひ廻らして、己が室の搖ぐほど震ひ駭れたさうである。何人しも自分が一生涯の罪惡を數へ、主の審判の嚴しさを思ひ、罰の終りなきことを考へたら、戰慄かずには居られまい。

あゝ主耶蘇よ、今私を審判き給はゞ、私の運命は如何であらう。善人さへ辛つと救かると云ふに、私見たやうな惡人は如何なるであ

らう。私は別に賴とする所はない、唯だ御身の御苦難の功德に賴るのみである。私は成るほど罪人である。然し御身は私の爲に死んで下さつた。胸を拊つて痛悔しさへすれば決して見棄て下さらぬであらう。

永遠の御父よ、私は御身に背いて犯したる罪を今悉く悔み悲み奉る。願くは私の罪惡を視ずして、聖意に善く適ひ給ふ御子の聖顏を顧み給へ、其の貴い御血を御覽し、其の痛々しい御傷を顧みて私を憐み給へ。

(三)、やうゝ最後の目を閉つたばかりで、愈々事きれたか否か一座の人々は尙だ疑つて居る時に、靈魂は已に永遠の世界に入るので

ある。全く絶息れたと確むるや、司祭は聖水を死骸にふりかけて、「天主の聖人は來りて彼を助け、天使は出て彼を迎へ、彼の靈魂を受取りて天主の御前に献げ給へ」と祈る。然し若しや萬一滅亡んでも居たら、聖人と雖も、將た天使と雖も、如何とも爲得ないであらう。

主が我等を裁かんとて來給ふ時は、御苦難の折りに受けられた御傷のまゝ顯はれ給ふであらう。其御傷ころ平生眞の痛悔もて己が罪を泣き悲んだ罪人には、大なる慰安を與へるであらうが、罪惡に溺れたまゝ現世を立つた惡人の爲には、如何なる恐怖の種子となるであらうか。

サテ〳〵天主の御審判の公庭に始めて進出た時、其の嚴しい御顏を仰視たらば、如何な心地がするであらう。ろればかりでも、地獄の苦罰より幾倍恐ろしう感ずるであらうか。

其時こそ彼の無上至尊の判事の御威嚴を仰視るであらう。其の自分を愛して凌ぎ下さつた數々の御苦其の自分に賜うた數眼りなき御哀憐、其の自分の爲に備へて下さつた千百の救靈の方法も一々分かるであらう。現世の財寶の虛しくて、永遠の財寶の優勝れたることなど、其時こそは明に悟るであらう。要するに凡百の眞理を有りの儘に悟るであらうが、然しもう餘り遲過ぎる。過失を修正むべき時期は既に過ぎ去つたので、今は如何とも爲べきやうもないであ

ら。

いかに最愛の耶蘇よ、私が始めて尊前に進出る時、願くは打解け給へる聖顔を仰ぐを得せしめ給へ。されば今より志を立て直し、行を悛めるに必要なる聖光と御助力とを惠み給へ。私は何時迄も御身を愛したい。よし今迄は御身の聖寵を輕んじて居たにせよ、以後は全世界の財寶よりも、之を貴重に思ひ奉る。私の決心は斯うである。たゞ御身が斯決心を固からしめ給へ。

默想第二、宣告、

(一)、平素耶蘇基督を愛して、心は浮世の事物に執着せず、凌辱を喜び、身を打懲して居た人、即ち天主の外に何一つ愛しなかつた人

は、審判の曉には如何に心樂しく覺ゆるであらう。

「來れ、善にして忠なる僕よ、汝の主の喜に入れ。汝は救はれた。喜び躍れ。此上は救靈を失ふの氣遣もないであらう」と云ふ聖言を耳にする時の嬉さは、あゝ誠に如何ばかりであらう。

之に反して罪を抱きながら現世を立去つた靈魂は如何であらう。未だ主の御口より罰の宣告が下らぬ前に、早や自ら「己は地獄の薪なよ」と宣告するであらう。

「詛はれたる者よ、我を離れて永遠の火に入れ」。主よ、私は御身に背いて大罪を犯した毎に、この怖るべき宣告を受くべき身とはなつたのである。あゝ主よ、御身は彼日に當つて私の判事となり給ふの

であるが、然し今は尙だ私の救主である。父君である。私が罪を痛悔しさへすれば、何時にても赦を與へて下さる。されば私は今胸を拊ち、涙を揮つて、犯したる程の罪を痛悔し、偏に赦を願ひ奉る。私の罪を悲むのは、地獄の罰を怖れる故でない、たゞ限りもなく愛すべき御身の聖意を傷め參らしたからである。

最と力ある代願者に在す聖母よ、私の爲に御子に祈り給へ。審判の曉に至らば、いかに力ある御身と雖も、私の滅亡を觀ながら、如何ともすること叶ひ給はぬであらうから、今の中に私を援け給へ。敎へ給へ。導き給へ。

(二)、「人は其の蒔さし所を刈取らん」。然り、一生の間に蒔いた所

を審判の日に刈取るのである。自分は今まで何を蒔いて居る。善を蒔いて居るか、惡を蒔いて居るか、德を蒔いて居るか、罪を蒔いて居るか、ヨク〳〵糺明して見ねばならぬ。審判の朝になつてから、彼もして居たら、此もして居たらと思ふ所を、今から直ぐに爲て置くが可い。

若し、今日、一時間の後に、主の審判を受けねばならぬと云ふなら、千金を投出しても、責めて一箇年の猶豫を求めて充分に準備したいものと思ふであらう。然らば今餘んの歲月を何故ろの爲に用はないのである。

アガトン修院長は多年、難業苦行に身を苦めながら、思一たび審

判に及ぶや、「あゝ自分は如何なる審判を受くべきであらう」と嘆息されるのであつた。舊約時代のヨブ聖人も、「神の起ちあがりたまふ時には如何にせんや、神の訊問ねたまふ時には何と答へまつらんや」と曰つたが、我等も然うである。主の起ちあがつて、我等が如何はどの聖寵を賜はり、又その聖寵を如何に怠慢にしたかと、一々訊問ね給ふ時には、何と應へ申すこと出來るであらう。

あゝ天主よ、御身を讃め、御身を愛し奉ちんと一心に熟望んで居るこの私の靈魂を、惡魔の手に引渡し給ふな。私は實に御赦を蒙むるにも堪へないのであるが、然し御身の限りなき御仁愛に頼り縋り奉る。主よ、私を憐み給へ。此の哀しむべき罪惡の中より救ひ上

げ給へ。私は心を悛めんと決心して居る。願望私を援け給へ。

(三)、我等が死ぬ時に起るべき事件は、由々しき大事件である。その結果の如何によつて、永遠の救濟か、窮りなき滅亡かゞ決定るのである。何人しも十二分の精力を絞つて、之が爲に努め勵むの決心がなくてはなるまい。

眞面目に右等の事情を思考へて觀たならば、何人にしても「然うだ、然うだ」と首肯かないものはない筈である。實際「然うだ」とすれば、何故我等は萬事を抛つて、一身を天主に献げ、大丈夫永遠の救濟を得られるやう、力めないのである。

「汝等遇ふことを得る間に天主を尋ねよ」と豫言者は我等を警告め

た。天主を見失つた儘、其御審判に進み出たら、トテも遇ふこと能ふまい。息の根の絶つて居る間にこそ、捜すものは見出し得るのである。

いかに愛すべき耶蘇よ、私は今まで御身の愛を輕じて、太く御意を痛まして居たが、今は只だ御身を愛し、亦御身に愛されんことをのみ冀ひ拳る。あゝ我が愛する天主よ、願くは御身を見出さしめ給へ。見出して幸と御身に抱き附くを得せしめ給へ。

默想第三、公審判、

(一)、あゝ世の愚なる罪人よ、主は汝をヨザファトの谷に埃ち給ふ。彼所で汝の思考はガラリと一變つて了ふであらう。彼所で汝は自分

の馬鹿げて居たことを覺つて、ハラ〳〵と血の涙を溢し、切齒して口惜しがるであらうが、然しもう晩からう。

今試嘗に離んで居る靈魂よ、汝よく堪忍べ、暫し善く堪忍べ。公審判の日に汝の苦痛は快樂に變じ、天の大なる歡喜ともなるであらう。

現世で太く輕侮められた聖人は、其日は如何に美はしき姿に成り變り給ふであらうか。之に反して地獄に罰された惡人は、たとひ王公貴人であらうとも、如何に恐ろしい狀態に窶れ果つるであらうか。

あゝ十字架に磔けられ、有りと有ゆる輕侮凌辱を浴せかけられ給うた耶蘇よ、私は今御身の十字架を抱きしめ拳る。浮世の財寶が何

である、榮譽が何である、歡樂が何である、私は是等を潔く拋げ棄て、唯だ御身を望み奉る。唯だ御身ひとりを望み奉る。御身の外に何一つとして望む所なしである。

(二)、「詛はれたるものよ、我を離れて永遠の火に入れ」、この「我を離れて」の一語を以て、公に主耶蘇の前を追ひ拂はれ、地獄に投げ込まれる時の惡人の心地は如何であらう。

あゝ主耶蘇よ、私も嘗て此の怖るべき宣告を受くべき身の上であつた。然し今は既に御赦を蒙つたであらうと賴母しく思つて居る。願くは再び御身に離れるを許し給ふな。私は御身を愛し奉る。又何時迄も愛し奉るであらう。

惡人の反對に、選を受けたる善人は如何であらう。「來れ、我父に祝せられたる者よ」とて、主耶蘇の優しい御聲もて天國に案内される時、彼等の心中に溢れる歡喜の情は、あゝ亦何物にか譬へられよう。

思へば〳〵自分ほど愚なものがあらうか。浮世の儚い榮譽、快樂に曳されて、この譬へやうもない大きな歡喜を、一文の價値もなき土塊見たやうに投棄てたことも幾度であるか知れない。然れども主が御哀憐を垂れて、自分の夢を醒まし、心の眼を開けて下さつたから、今よりは萬事を拋つて、唯だ主を一心に愛し、彼の恐るべき日に當つて、光榮の金冠を戴き、凱歌を奏つて、天の御國に入れる樣、

力めたいものである。

イカに最愛の耶蘇よ、私は罪に罪を重ねた悪人ではあるが、唯だ御身の價貴き聖血の功德によつて願ひ奉る、何卒私も彼の福者等の群に加つて、御身を一心に愛し、御身の尊き御足を抱きつゝ、千代に八千代に樂むを得せしめ給へ。

（三）、今信德の眼を豁つと開いて、ヨザファトの谷を觀望め、一度は必ず自分も彼處に集つて、或は善人と共に右の方に、或は悪人と共に左の方に居列ぶべきだと想つて見るが可い。之を想ふと共に、十字架の下に拜伏して、徐ろに自分の靈魂の上に眼を注いで見ねばならぬ。神なる判事の法庭に出頭られる丈けの準備が早や出來て居

るか、否か。もし出來て居なければ、手遲れしない樣今速かに支度に取掛らねばならぬ。

天主以外の事物より全然心を解脫して、毎朝默想をなし、しばゝ聖体を拜領し、五官の慾を抑制へ、特に熱心なる祈禱もて、主耶蘇と及ぶ限り密切な關係を結び置くべきである。救靈の方法は之に外ならぬので、斯方法を誠意より實行ふ人は、之れ天國に昇るべく豫め選定まれて居る徵候である。

あゝ救主にして亦判事なる耶蘇よ、私は御身に離れるを望まず、たゞ何時迄も御側に侍つて、一心に御身を愛したいとばかり、冀ひ奉る。主よ、私は御身を愛し奉る。然り、私は御身を愛し奉る。

始めて御身の審判の公庭に立つ時も、「あゝ私は御身を愛し奉る」と叫ぶを得せしめ給へ。主よ、もし罪に應つて私を罰せんと思召さば、御意の如く罰し給へ。たゞ御身を愛するを許し給へ。何時も御身を愛し、何時も御身に愛されることさへ出來たら、自餘の事は、御望の儘に、如何樣にも取計らひ給へ。

第七日、地獄の悲嘆と天國の福樂、

默想第一、些細の事で地獄に落ちたよと云ふ悲嘆、

(一)、地獄に罰された惡人の爲に、何よりも大きな苦罰は良心の咎責である。彼處には其蛆は死なず」。主が惡人に前以て注意して置かれた蛆、何時迄も死ぬことのない蛆と云ふは、地獄に於て惡人の心

を喰ふ良心の咎責に外ならぬのである。

殊に基督信者の身にして、地獄に罰せられた者に在つては、些細の事に曳かされて、此地獄に落ちたよと思ふのは如何に苦しい事であらう。彼等は永遠に泣き號くのである、「あゝ自分は儚い幸福、夢の如く快樂を求めんとして、天國をも、天主をも失つた、この獄舍に打込まれた、この呵責の場に、而かも終りなく打込まれたのである。自分は眞の敎を信ずるの幸福を得て居ながら、罪を犯して、天主を打棄て申したので、一生涯、憐れな月日を送り、果ては幾百倍と悲しい生命を、この猛火の中に永存へねばならぬ羽目に陷つた。自分を救はんとて、主は數々の光明、數々の方法を授けて下さつた

のに、自分は一つも其れを利用はないで、自から好んで此苦罰の中に飛び込んだのであるぞ！」。

あゝ主耶蘇よ、大罪を犯した其時にでも、私の生命を取上げて居なさつたら、私も今頃は地獄の底で、右樣の悲しい聲を放つて嘆いて居るであらう。サテも御身の御憐の難有さよ。何を以て感謝の微意を表すこと出來よう。たゞ御身に浴びせかけ參らした輕侮、凌辱をば一心に悔み悲み、萬事に超ねて御身を愛するより外ないのである。主よ、私は御身を愛し奉る。若し地獄に落込んでゝも居たなら、御身を愛すること出來なかつたらうにと思ひ、一心に御身を愛し奉る。御身は我天主、我愛、我一切の財寶、幾ら愛しても、愛

しても、之で充分と云ふことはないのである。

（二）、我等の目にさへ過ぎ去つた歳月は、夢の如く、一瞬間の如くしか見ない位だから、況して地獄の惡人の爲には、其の情慾を恣にした僅か五十年六十年の歳月は果して如何に見ゐるであらう。地獄は永遠に終ることなしでないか。幾千萬年經つてから後をふりかへつても、其の悲しい永遠は今始つたかの樣であらう。それに其の一瞬間の快樂の爲に、此の永遠窮りなき苦罰の淵に身を投込んだかと思つたら、何人か殘念で堪らなくないものがあらう。而かも其の五十年六十年の間も、絶間なく歡樂に耽つて居たと云ふ譯でない。天主に遠かり、罪惡に溺れて居ながら、如何な歡樂が味はれるであ